

発掘調査報告第16集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業（昭和58年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

青木遺跡

— 第1次緊急発掘調査報告書 —

1984

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会

発掘調査報告第16集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営は場整備事業（昭和58年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

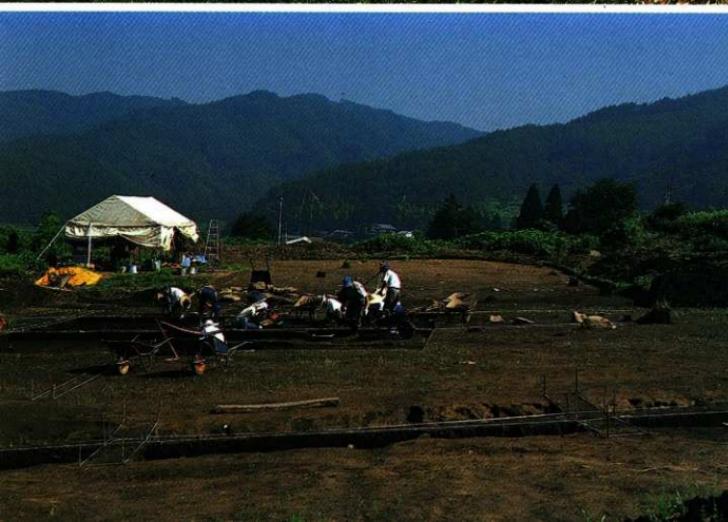
青木遺跡

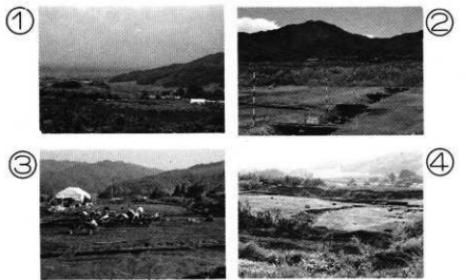
— 第1次緊急発掘調査報告書 —

1984

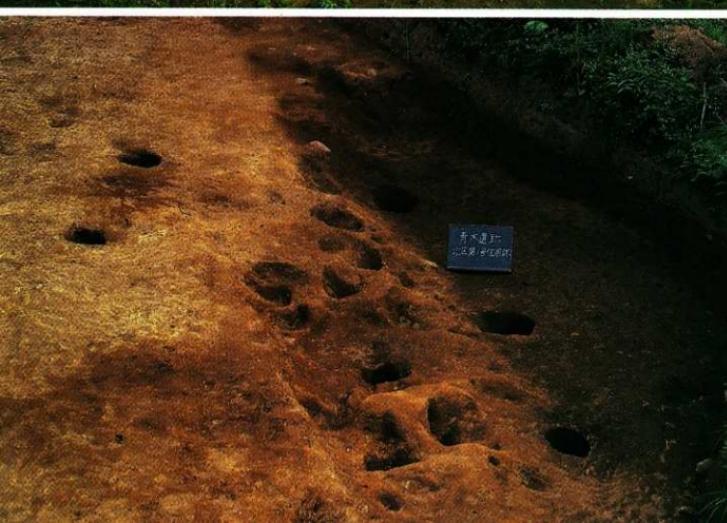
南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会





① 青木遺跡全景（東より）
② 青木遺跡第1・2次調査区(西より)
③ 第1次調査区全景（南より）
④ 第2次調査区全景（東より）

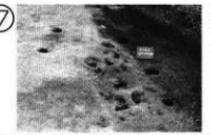




⑤



⑥

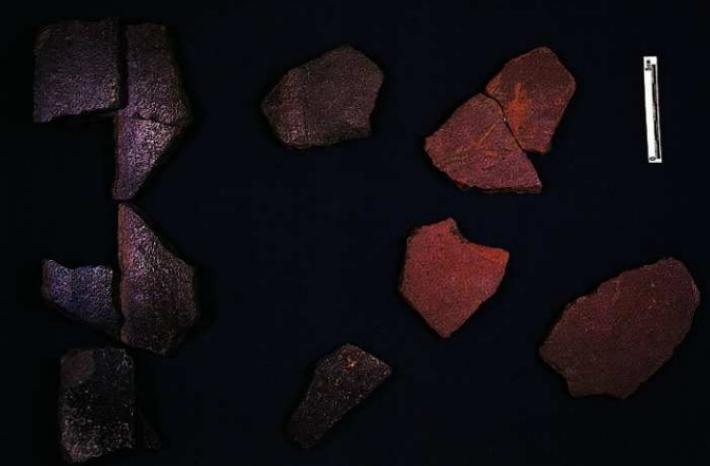


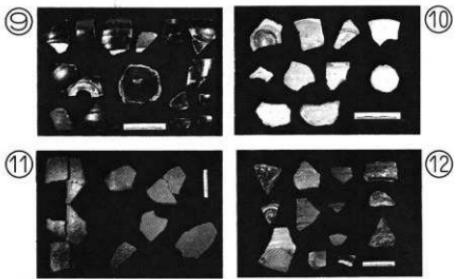
⑦



⑧

- ⑤ 青木遺跡第1次調査区柱穴址群
- ⑥ 第1次調査区敷石火葬墓
- ⑦ 第1次調査区第1号住居跡
- ⑧ 第2次調査区第1号住居跡





⑨ 青木遺跡出土青磁器
⑩ 同左 青磁器（裏面）
⑪ 青木遺跡出土灰釉陶器
⑫ 同左 施釉陶器



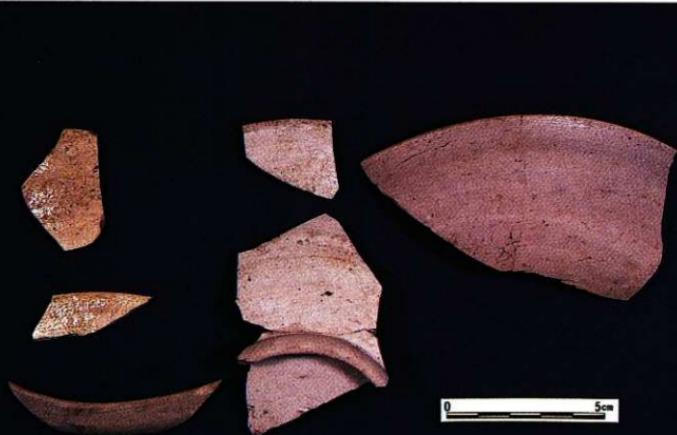
0 5cm



0 5cm



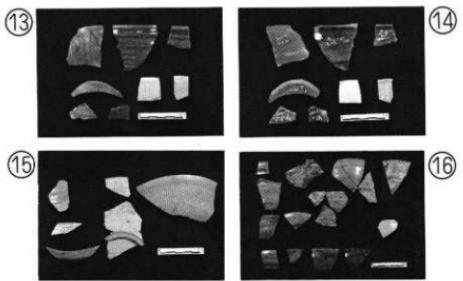
0 5cm



0 5cm



0 5cm



⑬ 青木遺跡出土天目茶碗

⑭ 同左 施釉陶器

⑮ 青木遺跡出土常滑大甕

⑯ 同左 施釉陶器

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、竜東地区的県営は場整備事業及び土地整備（個人）に伴い、昭和58年度に実施された青木遺跡第1次・第2次の緊急発掘調査の報告であります。

発掘調査を行いました青木遺跡は、竜東東伊那地区に属し、伊那山脈の一要所であります高鳥谷山及び火山峰に源を発する塩田川の左岸段丘上に位置しており、扇状地の中央部のやや高い舌状台地上に立地しております。戦国時代末期の天正年間初めに、この青木遺跡の西方250mの舌状台地先端部の青木城（館址）には、牛山道貢が居館を構えたと伝えられ、今回の青木遺跡の調査も、その一端を解明すべく期待されていました。

幸いにも今年度において、文化庁及び長野県教育委員会の御指導と御高配を得て、駒ヶ根市文化財審議会会长友野良一氏を団長とする青木遺跡発掘調査団を編成し、本格的な発掘調査を実施することができました。当調査の結果、第1次調査では、中世の住居跡、焼土址、配石遺構、礎石、堀、柱穴址群等の多数の遺構と青磁・天目茶碗等の多くの遺物が発見され、また、第2次調査では、平安時代末の住居跡、堀、土壙、集石址等の遺構と、土師・施釉陶器等の数多くの遺物が発見され、次年度に予定される青木城遺跡の発掘調査の基礎資料を検出し成果が得られました。

長期間にわたって、発掘調査をご指導下さった友野団長を初め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた南信土地改良事務所並びに東部土地改良区の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚意によりまして所期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆様方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和59年3月20日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

凡　例

1. 今回の調査は、昭和58年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業に先立つもので、昭和58年7月6日から8月24日にかけて調査したものである。
2. 発掘調査は、南信土地改良事務所の委託により、国県補助金を得て、駒ヶ根市教育委員会が中心となり、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。
3. 本報告書は、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述は簡便にした。
4. 遺物整理作業の中で、土器洗い及び註記は宮下節子・福沢泰陽が担当し、土器の復元を小松原義人が担当した。土器の実測は、小原晃一、石器の実測は、久保田茂明、小原が担当し、図面製図及びトレースは、北沢武志、久保田、福沢、中村智幸、宮下、小原が担当した。拓影、写真撮影は、小原が担当した。
5. 本報告書の執筆は、小原が行った。
6. 本遺跡の出土品及び諸記録・図面は、市立駒ヶ根博物館が保管している。
7. 採図中・写真的遺物Noは通し番号であり、本文中の番号と一致する。
8. 遺構・遺物関係の図面の縮尺は、その都度明示してある。
9. 遺物・石質については、下記のとおりである。

● 繩文土器	▣ 敲打器	● 施釉陶器	◎ 打製石器
(早・中期含む)	● 染付陶器	(中世・近世)	○ 磨り石
回 石英塊(火打石)	☆ 青磁器	● 磨製石器	* 鉄製品
■ 土師器(内黒)	▲ 天目	◎ と石	○ 灰釉
■ 土師器	▣ 常滑	● 古銭	▶ 黒曜石剥片
■ 須恵器	◎ 内耳		

10. 遺構等の断面層位は、下記のとおりである。

I層—表土(明褐色土)	V層—〃 + ローム	Ⅶ層—焼土
II層—耕土(暗褐色土)	VI層—黑色土	
II層—耕土(攪乱・うね)	VII層—〃 + ローム	
III層—黒褐色土(木炭粒・ロームブロック)	VIII層—褐色土+砂利	
III層—〃 (III+ロームふらん土)	VII'層—〃 + 小礫	
IV層—暗茶褐色土(木炭粒・ロームブロック)	VIII'層—ローム層(砂質)	
IV層—〃 (〃 + ロームふらん土)	VII''層—ロームブロック	
V層—褐色土	VIII''層—ロームふらん土	

目 次

序 文
凡 例
目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	9
第1節 発掘調査に至るまでの経過	9
第2節 調査会の組織	9
第3節 発掘作業経過(発掘作業日誌)	10
第Ⅱ章 遺跡の環境	14
第1節 位置及び地形	14
第2節 歴史的環境	14
第Ⅲ章 発掘調査	21
第1節 調査概要	21
第2節 調査北区遺構と遺物	21
第3節 調査南区遺構と遺物	24
第Ⅳ章 考 察	32
第1節 出土遺物	32
第2節 遺 構	42
第Ⅴ章 ま と め	42
挿 図 目 次	
第1図 青木遺跡位置図	17
第2図 青木遺跡及び周辺遺跡位置図	18
第3図 青木遺跡第1次・第2次調査区域及び遺跡範囲	19
第4図 青木遺跡第1・2次調査区遺構全測図	20
第5図 北区第1号住居跡実測図	23
第6図 第1号住居跡実測図及び遺物分布図	23
第7図 第1号住居跡及び周辺遺物実測図	21

第8図	北区遺構実測図及び遺物分布図	別添袋入
第9図	焼土集中箇所周辺出土遺物実測図	22
第10図	南区A～Pグリッド内遺構及び第1号集石址実測図並びに遺物分布図	別添袋入
第11図	第1号集石址及び周辺出土遺物実測図	26
第12図	南区A・B・E・F・I・Jグリッド、第2号集石址実測図及び出土遺物分布図	27
第13図	第2号集石址及び周辺出土遺物実測図	28
第14図	柱穴址群実測図及び遺物分布図	28
第15図	柱穴址群周辺出土遺物実測図	31
第16図	南の堀実測図及び遺物分布図	29・30
第17図	南の堀及び周辺出土遺物実測図	29・31
第18図	敷石火葬墓実測図	31
第19図	敷石火葬墓及び周辺出土遺物実測図	31
第20図	敷石火葬墓実測図及び遺物分布図	31
第21図	浙江省龍泉県の古窯址分布図	32
第22図	長野県内青・白磁器等出土遺跡分布図	38
第23図	白瓷・白瓷系陶器窯分布図・美濃古窯跡群分布図・常滑編年図	41

写 真 目 次

写真1	青木遺跡全景、第1次調査区全景	
写真2	第1次調査区南区グリッド・トレンチ設定状態	
写真3	第1次調査区近景及び調査風景	
写真4	第1次調査区北区第1号住居跡及び遺物出土状態並びに出土遺物	
写真5	第1次調査区北区礎石出土状態及び出土遺物	
写真6	第1次調査区南区第1・2号集石址及び出土石器	
写真7	第1次調査区南区南の堀I～Vベルト設定状態、I～Vベルト断面	
写真8	第1次調査区南区敷石火葬墓木炭・焼土集中状態、清掃状態、骨片出土状態	
青木遺跡日報No1・2		15・16
出土遺物一覧表		33

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那火山に位置する青木遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営ほ場整備事業の一部に入るとのこと、昭和57年9月7日に、長野県教育委員会白田主事、南信土地改良事務所柳沢、丸山主任、東部土地改良区片桐理事長、駒ヶ根市農林課倉田、市教育委員会北沢、増沢、小原、調査団長友野氏出席のもとに、事前現地協議を行った結果、記録保存を行うということになった。調査面積500m²、調査費用300万で、駒ヶ根市が事業主体として発掘調査を行うという協議内容であった。

調査費用の内訳は、南信土地改良事務所分217.5万円、国県補助分82.5万円（国庫補助分41.2万円、県費補助分12.3万円、市負担29万円）である。

事務手続きは、昭和58年5月2日付国庫補助金交付申請、同年4月27日付発掘調査届、同年9月19日付県費補助金交付申請を行う中で、同年4月21日に、南信土地改良事務所長と駒ヶ根市長との間に、「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を取りかわし、つづいて、7月2日に、市長と駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会長との間で、再委託契約を締結した。

調査は、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が行うこととし、青木遺跡発掘調査団を編成し、団長には、友野良一氏をお願いして、昭和58年7月7日から調査に入った。

第2節 調査会の組織(駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会)

顧問 鈴木 義昭 (駒ヶ根市教育委員長)

会長 木下 衛 (市教育長)

理事 小池 金義 (市教育次長) (会長職務代理)

〃 友野 良一 (駒ヶ根市文化財審議会会长)

〃 松村 義也 (〃 副会長)

〃 宮脇 昌三 (〃 委員)

〃 林 超 (〃)

〃 竹村 進 (〃)

〃 下村 幸雄 (市立駒ヶ根博物館長)

監事 中原 正純 (市文化財保存会会长)

ハ 北原名造(駒ヶ根郷土研究会会長)
 幹事 北沢吉三(市教育委員会社会教育係長)
 ハ 小林晃一(" 主査)
 ハ 北原和男(市立駒ヶ根博物館)
 ハ 野々村はるゑ(")
 ハ 齊藤香代(")
 ハ 小原晃一(")
 • 青木遺跡発掘調査団(事務所 駒ヶ根市上穂南2番15号 市立駒ヶ根博物館内)
 団長 友野良一(日本考古学協会会員)<発掘担当者>
 調査員 小原晃一(長野県考古学会会員)< " >
 ハ 小町谷元(上伊那考古学会会員)
 ハ 小松原義人(長野県考古学会会員)
 ハ 田中清文(")
 指導者 関孝一(長野県教育委員会指導主事, 至58.3.31)
 ハ 白田武正(" ")
 ハ 小林学(" " 自58.4.1)
 ハ 伝田和良(" ")
 ハ 部道哲章(" ")
 ハ 植口昇一(長野県史刊行会専門主事)
 ハ 宮下健司(")
 ハ 林茂樹(日本考古学協会会員) (順不同, 敬称略)

第3節 発掘作業経過

• 発掘作業日誌

- 7月1日(金) 小原・小町谷両名で、発掘器材を整理し、不足器材、消耗品を手配する。
- 7月6日(水) 博物館より、上伊那貨物用トラックで、発掘器材を運搬する。現場の主グレイ10m × 10m間隔で、南・北両区に設定する。南区南西隅を、あー1とし、北方向へ6・11~31、東方向へ、か・さG.Pとする。10m × 10mの間に、2m間隔に竹ぐしを打ち、小グリッド設定。
- 7月7日(木) 午前8時00分、作業員11名、調査員2名(小原・小町谷)が現場集合し、作業時間は、午前8時から午後5時までとし、昼食休1時間、午前・午後休憩15分ずつとすることを話し合う。午前中、テント設営、器材整理、南区小グリッド掘り下げを始める。午後、1時30分より、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会役員(鈴木顧問外、8名)、作業員、調査員全員で長春

寺吉沢住職をお願いし、発掘作業の安全と成果を祈って、鍵入れ式・仕事初めを行う。

南区あー1・3・5・7G、う・おー18を掘り下げ、あー1Gからは内耳片2点、あー7Gからは陶器底部片が出土する。東へ向って表土・耕土は浅くなって行く。

7月8日(金) 雨天の為、現場作業休み。

7月9日(土) 南区周辺を $S = \frac{1}{200}$ で地形測量をし、グリッドを図示する。BM設定、あー11G P の南に L=718.400とする。あー9・11・13、うーけー3・5・7・9G を掘り下げる。うー7・おー5G より打製石斧出土。南から北へかけて徐々に表土が深くなる。ベルト設定。

7月10日(日) 北区周辺を $S = \frac{1}{200}$ で地形測量を行う。北区ベルト設定。南区あ・う・お・き・けー11・13G、う・き・さーSNトレーナーを掘り下げる。内耳・天目・染付・陶器・打石斧等が出土する。

7月11日(月) 南区から北区へ延びる SNトレーナー(う・き・さ)、西から東へ延びる WEトレーナー(5・9)を設定し、掘り下げる。トレーナー掘り下げ完了。さーSNトレーナーセクション清掃・写真撮影。セクション実測。9ーWEトレーナー・こ周辺、表土30~35cmに焼土検出。5ーあ・こ・さG、6ーうG、9ーう・お・きG掘り下げ。土師器、陶器、染付等出土。さー16~34SNトレーナー、きー16~34SNトレーナー掘り下げ。常滑、内耳、青磁出土。出土遺物写真撮影。北区へトレーナーの間に 5×5m の A~H グリッド設定。

7月12日(火) 南区きーSNトレーナー、うーSNトレーナーセクション実測。5・9ーWEセクション実測。北区うー22~33トレーナー、うーきー20トレーナー、いーきー25トレーナー、いーきー30トレーナー掘り下げ。う・きーSNトレーナー写真撮影。北区より青磁、常滑、瀬戸出土。

7月13日(水) 南区5・9ーWEトレーナー(以後、Tと略す) 0~13mまで実測。ブルドーザーで耕土はね(三沢ブル)。北区西側の地形測量。B・D・F・Hグリッド掘り下げ完了。C・E・Gグリッド掘り下げ中途。Cグリッドより青磁碗口縁部出土。Bグリッドより打製石斧、瀬戸、常滑、青磁出土。Eグリッドより常滑、内耳出土。

7月14日(木) 北区きーSNセクション実測。写真撮影。20・25・30ーWE、Tセクション写真撮影。C・F・Gグリッド掘り下げ完了。南区全体5分の3仮清掃。南隅に東西に壠の様な落ち込みあり。仮清掃下より、寛永通宝、陶器、染付、打製石斧が出土。写真撮影。

7月15日(金)~18日(月) 雨天及び会議の為、現場作業休み。

7月19日(火) 北区20・25・30ーWE、T仮清掃、写真撮影、セクション実測。30ーあGより内耳部出土。南区全面仮清掃。主グイ(10×10m)打ち直し。壠に南北5本、東西1本のベルト設定。北区A~Hグリッド掘り下げ完了。

7月20日(水) 北区さーSN、T16~34GPにかけて、セクション実測。南区壠ベルトを残し掘り下げ。Nから陶器底部片出土。写真撮影。

7月21日(木) 雨天の為、現場作業休み。

- 7月22日(金) 北区26—う～さ, 31—う～さベルトはずし。き—26～31, さ—21～31ベルトはずし。午後雨天の為、現場作業中止。
- 7月23日(土)・24日(日) 雨天の為、現場作業休み。
- 7月25日(月) 北区き—21～25ベルト, 21—え～かベルトはずし。17—き～さ, 23～27—あ～うの範囲の耕土はね。天目, 内耳出土。
- 7月26日(火) 北区No.1～26の出土遺物、平板測量、レベル実測、写真撮影。16～20—か～さ, 23～25—あ～いの範囲の耕土はね。打製石斧、天目、常滑、鉄製品出土。21～26—う～きG出土遺物、焼土集中区、礫実測、レベル実測、写真撮影。
- 7月27日(水) 北区16～20—え～かG耕土はね。23～31—あ～うII層まで掘り下げ。16～21—き～さG出土遺物、礫実測、レベル実測、写真撮影。
- 7月28日(木) 北区16～19—う～かG耕土はね。16～31—う～か～い～さG仮清掃。29～36—あ～いG耕土はね。18～31—く～さG出土遺物平板測量、礫、焼土集中区実測、レベル実測。写真撮影。南区堀IV・V掘り下げ。
- 7月29日(金) 北区15～18—お～くG, 20～25—く～さG, 20～22—く～さG内の礫、出土遺物、木炭集中区平板測量、レベル実測、写真撮影。南区6～16—あ～さG内III層以下に5×5mのグリッド設定(A～Pグリッド)。南の堀I～V掘り下げ中途。焼土・木炭集中区検出。
- 7月30日(土)～8月1日(月) 行事及び雨天の為、現場作業休み。
- 8月2日(火) 南区F・Gグリッド掘り下げ。Fは完了。J・Kグリッドは掘り下げ中途。F・G・Kグリッドより常滑、須恵器、瀬戸出土。
- 8月3日(水) 北区遺構及び地形測量 $S = \frac{1}{200}$ で行う。南区B・C・J・Kグリッド掘り下げ。J・Kは完了。B・Cは%完了。H掘り始める。B・C・F・G・J・Kグリッド出土遺物平板測量、レベル実測、写真撮影。Cグリッドより陶器片出土。
- 8月4日(木) 南区南の堀I～Vのセクション清掃、線引き。F・G・J・Kグリッド出土遺物平板測量、レベル実測、写真撮影。B～D, H, Lグリッド掘り下げ。B・C完了。
- 8月5日(金) 南区C, Dグリッド掘り下げ完了。A・E・Lグリッドは中途。南の堀I～V清掃、写真撮影、セクション実測。Eグリッドより瀬戸出土。D～Lグリッドにかけ砂層検出。
- 8月6日(土) 南区B～D, H, Lグリッド内出土遺物平板測量、レベル実測、写真撮影。H・Lグリッド掘り下げ完了。天目、灰釉出土。A・E・Iグリッド掘り下げ。Eグリッド内は大石と礫集中箇所検出。南の堀I～V内掘り下げ。
- 8月7日(日) 南区堀I～V内掘り下げ。仮清掃後、写真撮影。A～Oグリッド内写真撮影。K・L・O・Pグリッド内出土遺物平板測量、礫実測、レベル実測、写真撮影。
- 8月8日(月) 南区6～16—う～かS Nベルトセクション実測。Pグリッド掘り下げ完了。北区25～31—あ～うG内掘り下げ。

- 8月9日(火) 北区26~31—あ~うG掘り下げ。30・31—あG周辺に住居跡と思われる落ち込み検出。30・31—あ・いGより天目、内耳、火打石、繩文中期土器片出土。南区O・Lグリッド内出土遺物、礫平板測量、レベル実測、写真撮影。11・13—WEベルトセクション実測。
- 8月10日(水) 北区31—あ~うG掘り下げ。第1号住居跡とする。覆土下層より内耳、天目、焼土出土。南区堀全面測量 ($S = \frac{1}{200}$)。Pグリッド内出土遺物平板測量、レベル実測。6~16—う・かSNベルト、11—ベルトはずし。写真撮影。柱穴址群掘り下げ。平板測量。
- 8月11日(木) 南区9—WEベルト写真撮影、セクション実測。A・E・Iグリッド出土遺物平板測量。北区26~31—あ~うG掘り下げ。
- 8月12日(金) 北区26~32—あ~うG出土遺物・礫平板測量、レベル実測、写真撮影。南区9—WEベルトはずし。D・H・L・Pグリッド内礫除去。
- 8月13日(土) 北区26~32—あ~うGベルト写真撮影。26~32—あ~うG掘り下げ。南区南の堀V内平板測量、レベル実測。
- 8月14日(日)~16日(火) 益休み。
- 8月17日(水) 雨天の為、現場作業休み。
- 8月18日(木) 南区南の堀II~V内出土礫、堀、出土遺物平板測量、レベル実測。V内清掃、II~V礫はずし。焼土集中区(堀I)清掃、写真撮影、セクション実測。
- 8月19日(金) 南区南の堀II~V内出土礫、残土取り上げ。堀内I~Vベルトセクション清掃。
- 8月20日(土) 北区26~32—あ~うG板清掃後、写真撮影。さらに掘り下げ。第1号住居現況平板測量。ピットが南側にあり、床は部分的に(西の土手にかけて)貼り床である。
- 8月21日(日)・22日(月) 雨天の為、現場作業休み。
- 8月23日(火) 南区南の堀I~Vベルト清掃。写真撮影。IV・Vベルトセクション実測。Vベルトはずし。清掃後写真撮影。
- 8月24日(水) 南区南の堀I~IIIベルトセクション実測、ベルトはずし。写真撮影。本日をもって、第一次調査終了。

〈発掘参加者名簿〉

中村文夫、渋谷鉄雄、宮下三郎、小林正信、白川仁重、佐藤慶子、赤羽昭子、佐藤秋子、小林満寿子、渋谷吉子、赤羽美子、下平チカエ、下平昭恵、川上敏明、北沢武志、中村智幸、久保田茂明、北村英憲、小池裕司、下平和弘

6週間余にわたって、連日の真夏の炎天下のもとで、発掘調査に作業員として参加していただいた皆様方の御理解と御協力により、無事に所期の目的を達するべく調査できましたことに対して、心から感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。 (小原晃一)

第II章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形(第1・2図、写真1・2参照)

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那火山3434, 3435, 3530, 3531—1・2番地に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ4.5kmに位置し、標高は718m前後である。

駒ヶ根市は、三つの地区から成り、天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側部分に中沢地区、北部分に東伊那地区があり、その内の東伊那地区的北中央部に当遺跡は位置している。

伊那谷は、諏訪湖より流れ出る天竜川とその支流である各々の田切川により開析され、西に木曾山脈(中央アルプス)があり、東に赤石山脈(南アルプス)、中央構造線をはさんで戸倉山、高島谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走っている。この伊那山脈の一角をなす高島谷山及び火山峰に源を発する塩田川が造り出した扇状地の中央部のやや高い舌状台地上に立地し、塩田川との比高差は、最短距離地点で50mを測る。地質基盤は、礫層からなり、その上に新期ローム層(青木遺跡では砂質ローム)が堆積している。

当遺跡の層位は、凡例に示したとおりであるが、第1次調査の内、南区は割合ノーマルであるが、北区は開墾時の土層の移動等により、自然礫層の表出が顕著に見られ、Ⅲ層以下の層位が安定していない。

第2節 歴史的環境(第2図参照)

天竜川より東の地区(東伊那・中沢地区)は、遺跡の宝庫として知られ、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」(故鳥居龍藏博士著)に数多くの遺跡が確認されている。特に、犬竜川左岸段丘上には、数多くの中世城址(歴史的文献及び調査は少ない)、扇央部には弥生時代後期の遺跡、山麓部には縄文時代の集落跡が存在している。第2図中2は青木城(中世)、3は高山社(青木城居館主)、牛山道賀氏に関する棟札が保存されている)、4は塩田城(中世)、5は青木北(縄文・平安)、6は上塙田(縄文・平安・中世)、7は栗林神社東(弥生後期)、8は善込(弥生後期)、9は垣外上(弥生)、10は反目(縄文)、11は箱畠(平安・中世~近世)、12は大久保城(中世)、13は高田城(中世)、14は城村城(中世)、15は小城(中世)、16は稻村城(中世)、17は殿村(平安)、18は原城(中世)、19は古城(中世)、20は高見城(中世)。

青木遺跡 1
新潟市立歴史文化博物館蔵
新潟県上越市
1983.7.7 (木)

卷之三

東伊那山の木造館で、昭和5年県営は豊能農業に先立
て、緊急経営難がいよいよはじまりました。場所は、高馬台
を斜面とするため大屋根居る危険から、伊那生田飯田駅

龜引に向。てのびる塙田川と天王川が並り出した原野地の中央に立地しています。標高は700m前後を測ります。



青木遺跡日報No. 1

7月7日(火) 午前中は、デットの監督・脚本家と一緒に前日に撮影した（ $10m \times 10m$ ）をしておいた大グリットの中に、 $2m \times 2m$ のグリット（脚録坑一基盤目）に投げ玉屋と達也の巴含脛、運搬の有無を調べるために握る四角の穴）を取除し、スコッペショレンを供して握りはじめました。その後、脚本家（園田）が脚録場面（図2）の構造が完工しました。

午後は参考図書の安全と疾病

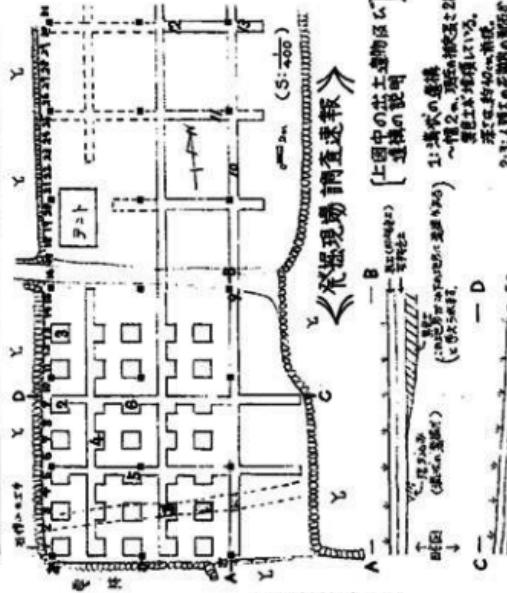
木下軟骨委、竹村正喜、北原監事、小地理島、斎賀委員会(次長等)、博物館成員、次野田長、調査員、作業員一同で、長崎吉次監修お附りして、銅八咫を打いました。

卷之三

卷之三

青木遺跡、2

青木遺跡調査報告書
解説、検討
1983.7.11(火)



青木遺跡日報No.2

〈発掘現場調査速報〉

- 〔上図中の出土遺物はなし〕
- 1: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 2: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 3: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 4: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 5: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 6: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 7: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 8: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 9: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 10: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 11: 洋式の壺
（土器、陶器）
 - 12: 上野玉器（玉器）
 - 13: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 14: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 15: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 16: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 17: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 18: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 19: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 20: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 21: 青銅鏡
（鏡4枚）
 - 22: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 1: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 2: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 3: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 4: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 5: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 6: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 7: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 8: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 9: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 10: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 11: 洋式の壺
～幅2.5cm、底径14cm、高さ22cm。
蓋は付属しない。底は付属しない。
- 12: 上野玉器
（玉器）
- 13: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 14: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 15: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 16: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 17: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 18: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 19: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 20: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 21: 青銅鏡
（鏡4枚）
- 22: 青銅鏡
（鏡4枚）

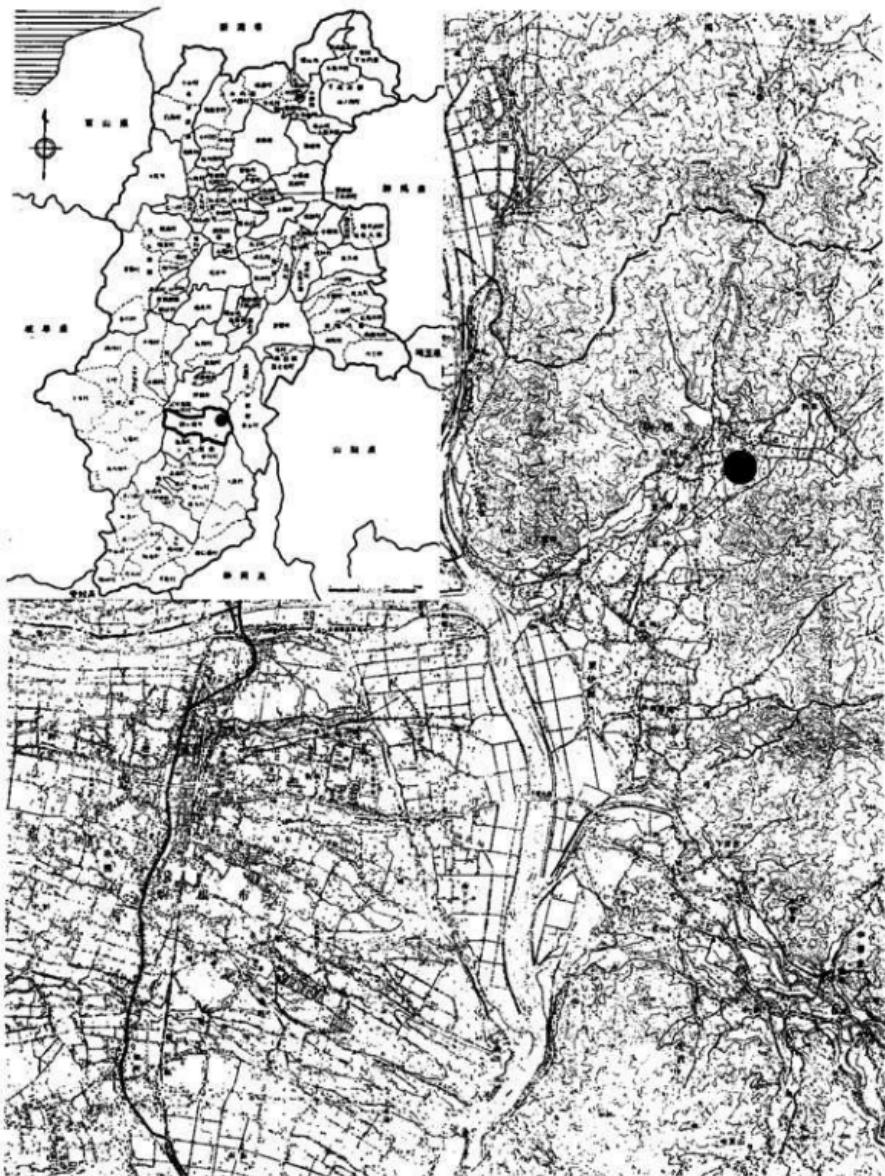
	西	南	東	北
面積	1120	180	180	180
高さ	200	200	200	200
厚さ	B.C.O.	B.C.O.	B.C.O.	B.C.O.
形状	一	一	一	一



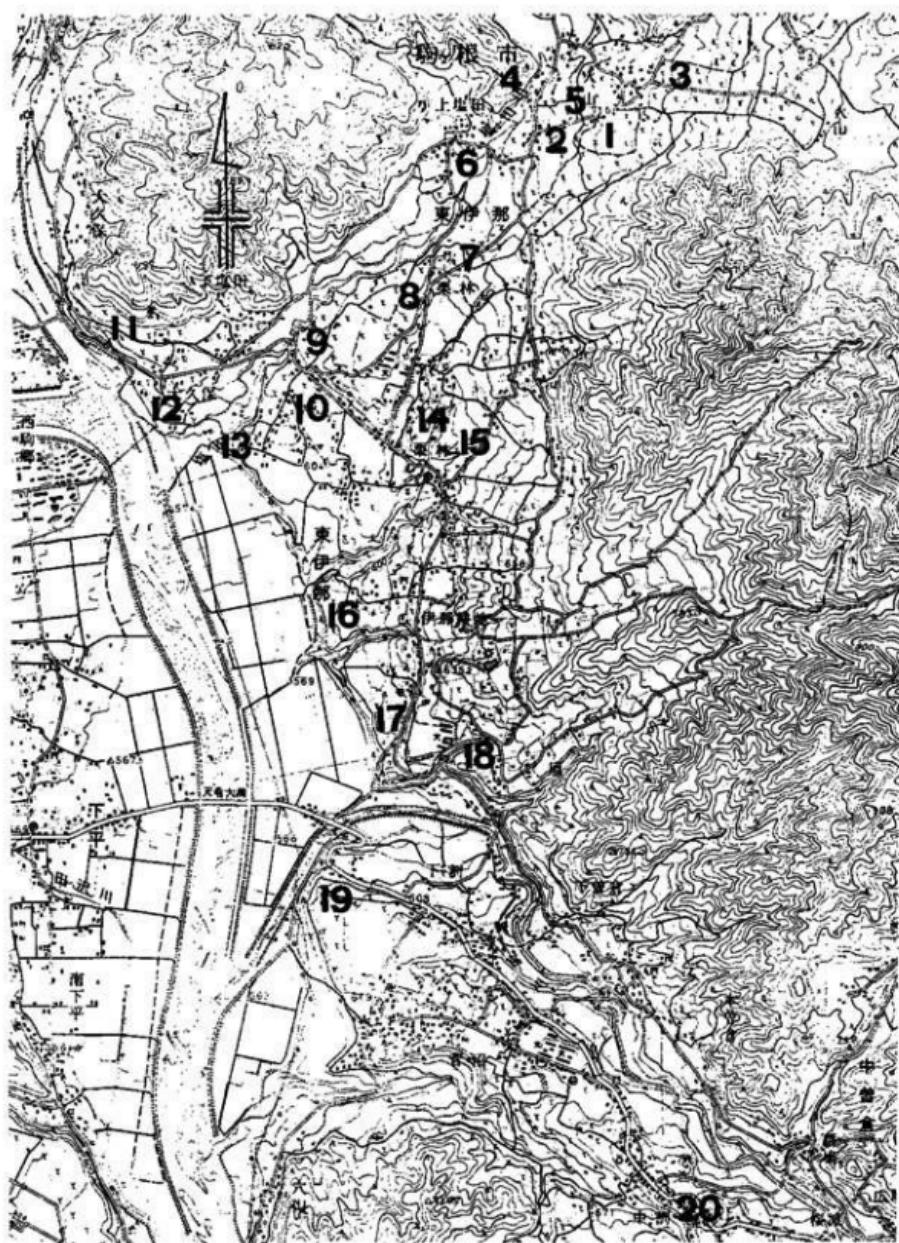
〈音波（音波）〉

音波を感覚し、だ畜火候焼成の焼きものもさす。この種は純木音波を感覚し、そこに含まれるわずかの物質が還元して青色を呈するのである。中國ではすでに般く(般くは400年)の時代に、この原絨をせけた焼きものがつくられているが、焼成が還元していくため焼成は青い草色にしかならず。た。その後、開拓から漢にかけてこの原絨は名前でつくられ、漢の末頃には始皇帝在位中に心にした越州地方(越州地方)が不生産地として目撃する。越州でつくられた原絨は純青色で、色も次第に草色から淡緑へと変換されて青緑に近づいて。た。船代から五代にかけて杭州・秀丘の一層の燒成をみて(焼成音波と崩壊)、のち翠色の美しい音波として完成した。宋代に至て官窯・河窯・耀州窯・哥窯などと定型化され、やがて高麗・や麻・タイに移転が実現してお。た、「原経音波不時矣より折井」

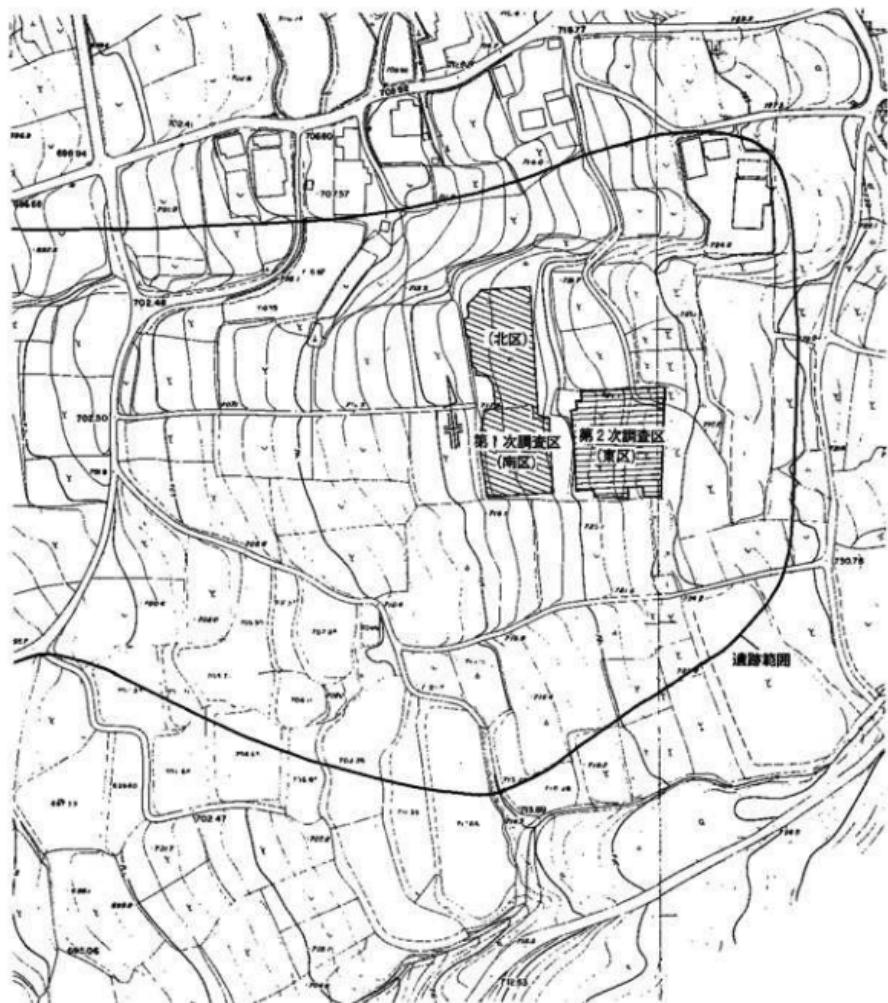
折井が流れてお。た、「原経音波不時矣より折井」



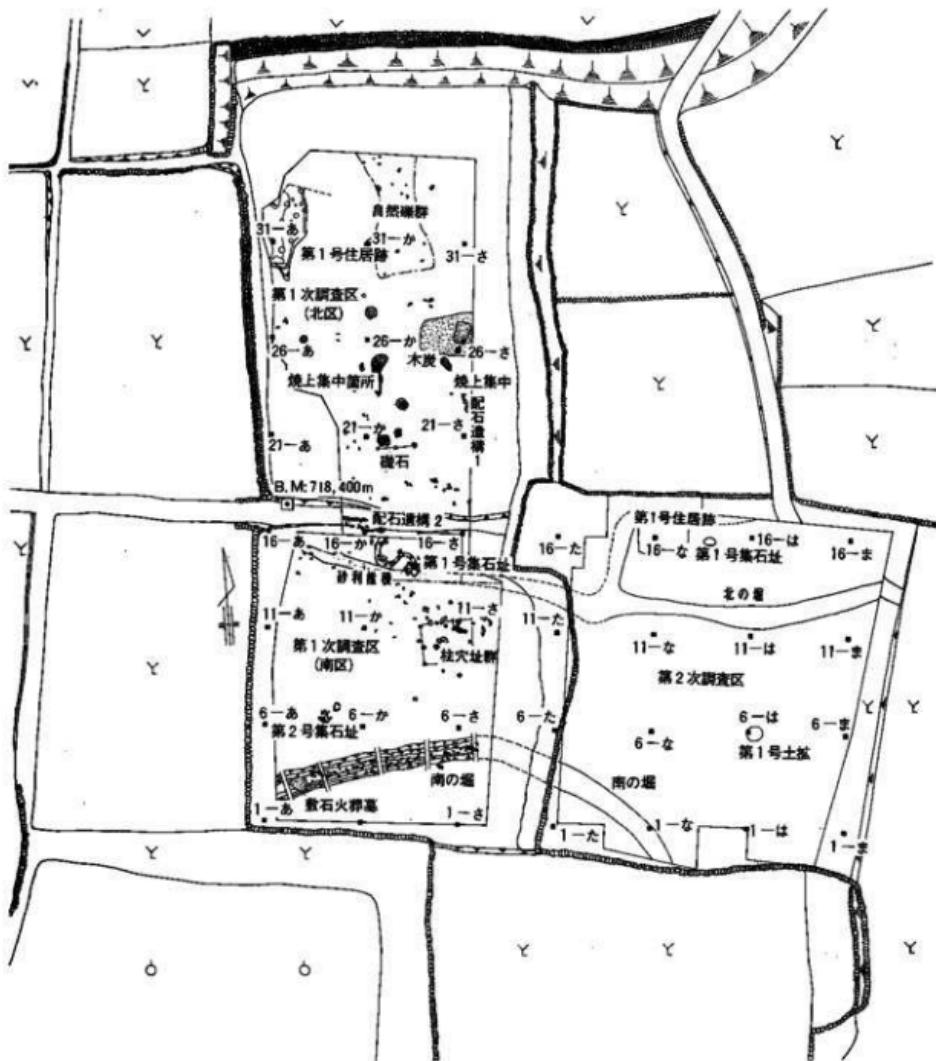
第1図 青木遺跡位置図 ($S = \frac{1}{50,000}$)



第2図 青木遺跡及び周辺遺跡位置図



第3図 青木遺跡第1次・第2次調査区域及び遺跡範囲 ($S = \frac{1}{2,000}$)



第4図 青木遺跡第1・2次調査区遺構全測図 ($S = \frac{1}{600}$)

第Ⅲ章 発掘調査

第1節 調査概要(第4図、写真1~3)

調査に先立ち、第1次調査周辺の桑畠、畑地の表面採集を行い、青磁器片、灰釉、黒耀石剝片、天目、染付、打製石斧、繩文土器片、土師器片と様々な時代の遺物を採集する。

調査方法は、発掘調査に先立ち、調査区の南西隅栗林地角を、基点(あー1G・P)として、台地の傾斜方向に対して、ほぼ東西一南北軸に沿うように $10m \times 10m$ のポイントを設定して、調査区中央東西に入り込む農道より南を南区、北を北区とした。基点(あー1G・P)から、東方向へか・さ、北方向へ6・11・16・21・26・31・36と設定した。掘り下げ方法は、 $2m \times 2m$ のグリッドを南区へ設け試掘し、ブルドーザーで耕土を排土した後で、 $5m \times 5m$ のグリッドA~Pに分けた。北区は、 $5m \times 5m$ のグリッドA~Hに分けた。層位を確認する為のトレンチをグリッドに接して、南区では9・11・13-WEベルトセクション、北区では20・25・30-WEベルトセクション、南区から北区へ通すSNベルトセクションをか・さ-SNとした。

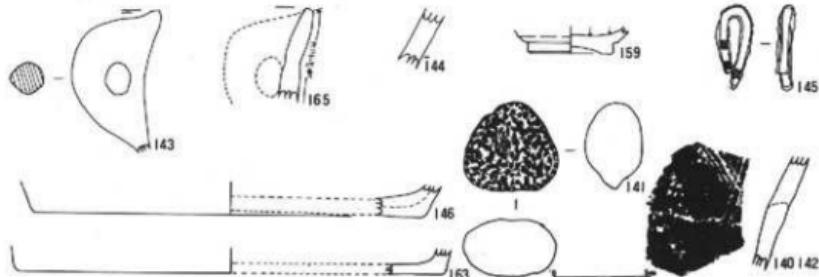
出土遺物は、試掘段階でのグリッド、トレンチ内は一括して取り上げ、南区ではⅢ層以下を全点図面上にドットし、レベルを実測し、北区では、Ⅱ層以下を全てドットし、レベルを実測した。

なお、ブルドーザーで耕土したのは、南区I・II層上層を耕土したのみである。

結果として、南区・北区を合わせて、ほぼ $1,200m^2$ を発掘調査した。

第2節 調査北区遺構と遺物(第5~10図、写真4・5参照)

第1号住居跡(第5~7図、写真4)



第7図 第1号住居跡及び周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$)

本跡は北区北西隅土手際より検出され、西側半分は土手の為未調査である。現状のプランから、不整長方形と推定され、東西3m・南北6mが検出される。深さは東壁でなだらかで5cm弱、南壁で35cmで、自然傾斜地に造られている。床面は南・北の面は貼り床でタタキがされている。床面北西方向に焼土・木炭が集中し3~5cm堆積している。主柱穴はP₁~P₄が存在しP₄は直線上からは、はずれ、深さは、32~50cmを測り、P₁~P₄の底部は堅い。

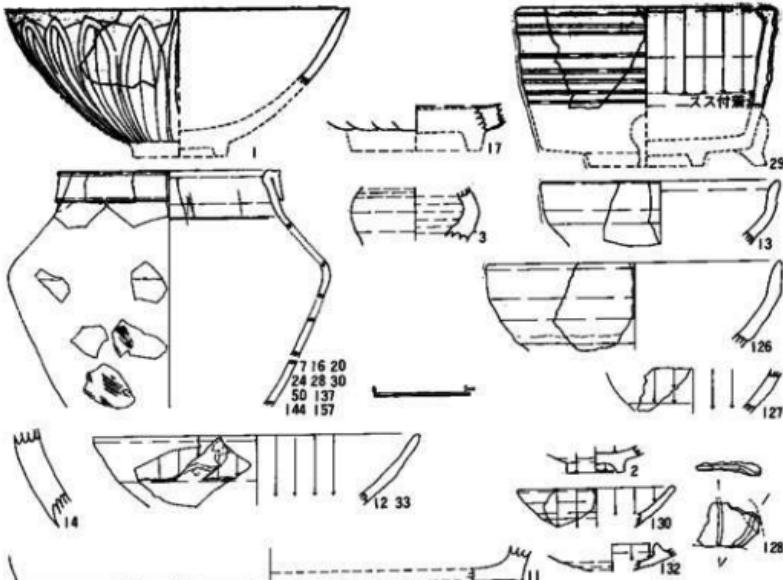
出土遺物は、第7図及び遺物一覧表を参照されたいが、No.140~142の縄文中期初頭の土器を除き、内耳土器片、天目破片、火打石が出土している点から、15世紀代の住居跡と考えられる。

礎石(第8図・写真5)

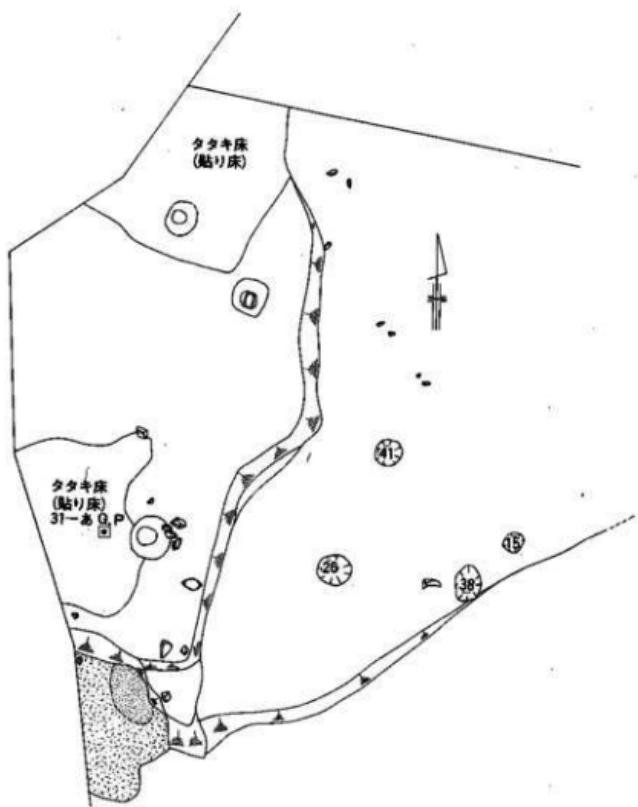
本跡は、21か・さG・P軸に平行して、東西軸方位に沿って砂質ローム層直上に3点遺存していた。石質は、3点ともに花崗閃緑岩の盤状石で、大きさは長さ30~45cm、幅25~35cmを測る。礎石の間隔は1m80cmでほぼ六尺である。北方すぐに焼土集中箇所が遺存している。周辺からは、常滑、火打石、染付陶器等が出土している。

配石遺構1(第8図)

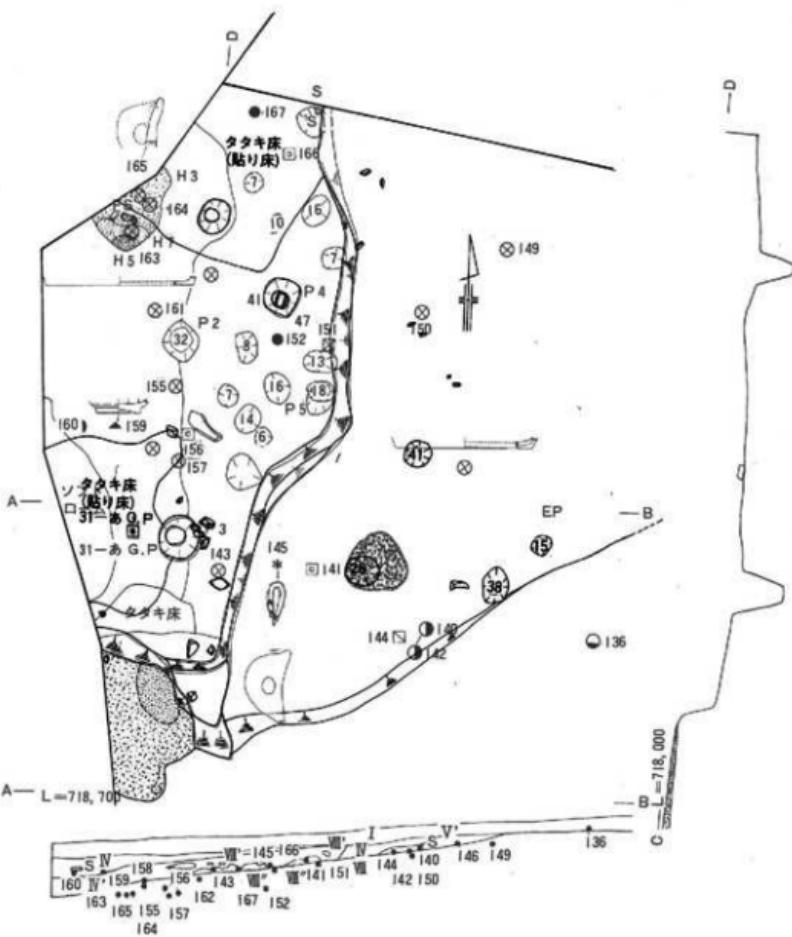
本跡は、礎石中心部より北東へ9mの地点から検出された。軸は、南北軸にほぼ近い。石質は花崗岩と花崗閃緑岩で7点が遺存し、中央の大きな石が花崗岩で長さ45cm、幅40cmを測り、ほか



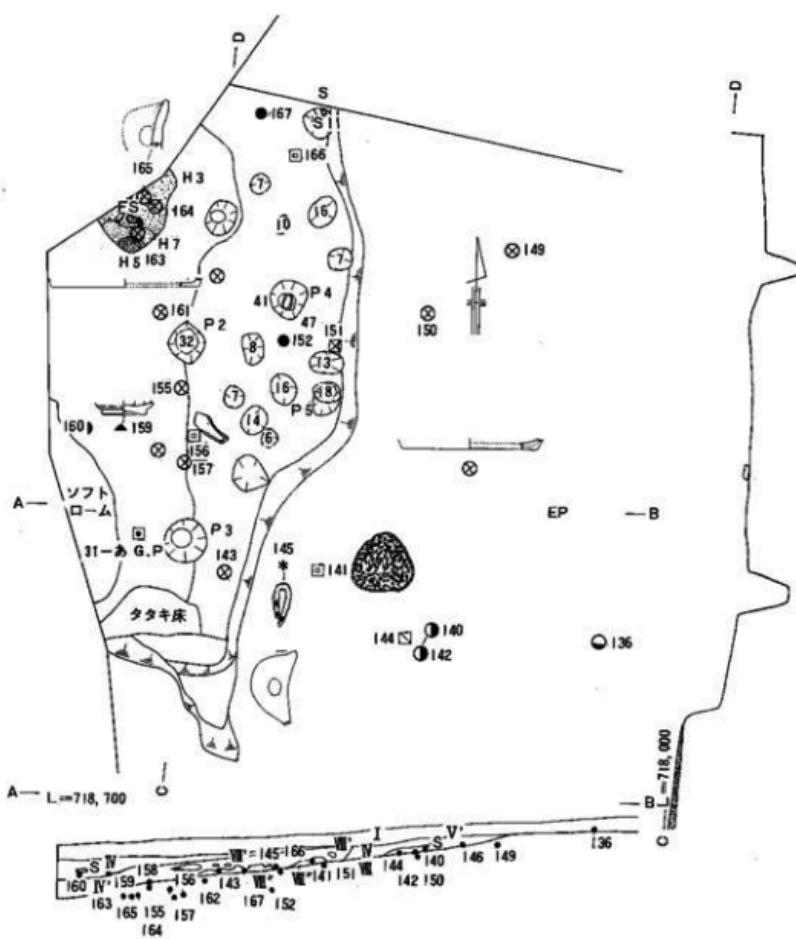
第9図 焼土集中箇所周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$, No. 7 ~ 157は $\frac{1}{6}$)



第5図 北区第1号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{60}$)



第5図 北区第1号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{60}$)



第6図 第1号住居跡実測図及び遺物分布図 ($S = \frac{1}{60}$)

は、長さ15~35cm、幅20cm前後を測る。周辺からは、青磁、常滑窯等が出土している。

配石遺構2(第8図)

本跡は、北区と南区の境の農道下から検出され、礎石からの距離は9mを測る。石質は花崗閃綠岩と花崗岩が半々である。主として、長さ50cm、幅35cmの石が、東南東位に2列に配石されている。周辺から少し離れて、内耳片と内黒土師器片が出土している。

焼土集中箇所(第8図)

本跡は、26-さG・P周辺の木炭・焼土集中区を除くと、広・狭範囲を合せて、8ヶ所検出され、最広範囲で、3m×1m、最狭範囲で直径35cm位で、厚さは平均3~4cm位である。最広範囲の集中箇所の北端には、直径20cm、深さ30cmのビットが存在するが、ほかのビットが周辺からは検出されなかった。周辺からは、天目、常滑、青磁(碗)、施釉陶器等が出土している。

木炭・焼土集中箇所(第8図)

本跡は、26-さG・Pの周辺に、現況で5m×50cm×4m×50cm位の不整円形状に集中分布している。26-さG・Pの北側に特に焼土が集中、南側に木炭が集中、さらに南に少し離れて焼土が集中している。堆積はあまり厚くなく、1cm位である。周辺からは、常滑、青磁香炉、施釉陶器が出土している。

第3節 調査南区遺構と遺物(第10~20図、写真5~8)

第1号集石址(第10・11図、写真6)

本跡は、南区にあって北区との境に近く、16-さG・Pから南西方向6mの地点に位置する。規模は、東西1m×60cm、南北1m×40cmのほぼ円形をしていて、中央に90cm×80cmの五角形をした花崗閃綠岩が遺存し、周辺に数多くの直径10~20cmの閃綠岩が集中している。周辺からは、須恵器、土師器(内黒)、灰釉(大口壺か?)、天目、内耳、常滑、施釉陶器、少し離れて、鉄製品、施釉陶器、と石、打製石斧等が出土している。すぐ南に接して、東西に砂利層が35cm前後堆積し、Dグリッドまで、長さ12m、幅1m×30cm前後で続き止っている。本跡から北西に向って比高差20cm位の傾斜で北区配石遺構2へ上って行くマウンド状の傾斜地がある。

第2号集石址(第12・13図、写真6)

本跡は、6-かG・Pから北北西3m×50cmの地点に位置し、北東に長さ85cm、幅75cmの三角形に近い、花崗閃綠岩の自然石が遺存している。規模は、東西1m×20cm、南北1m×20cmで密度の薄い円形状をしている。周辺からは、施釉陶器(瀬戸・美濃産)、打製石斧、磨製石斧、繩文土器片が出土している。

柱穴址群(第14・15図)

本跡は、11-さG・P周辺より検出され、P₁~P₁₆までの計16本が確認された。柱穴のプランはほぼ円形をしていて、深さは、8cm~49cmとまばらである。軸はややずれるが、柱穴址群のブ

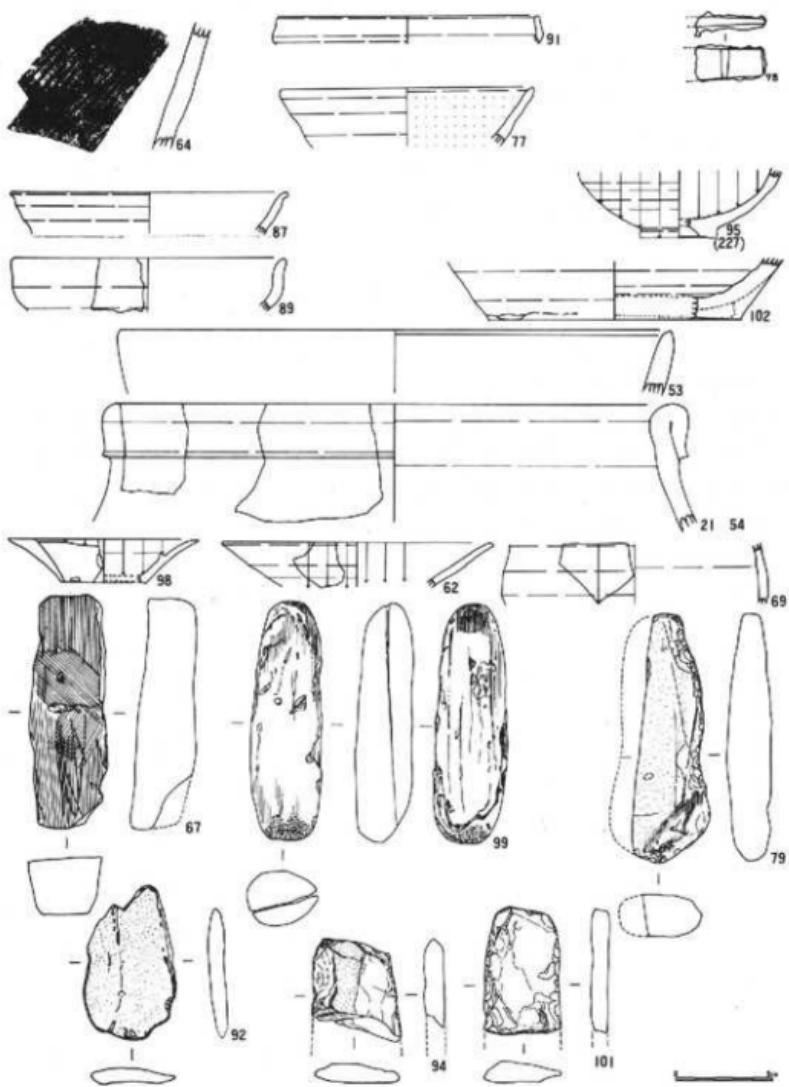
ランは東西軸の長方形と考えられ、P₁～P₉までがそれにあたる。P₂・P₄・P₇が8～13cmと浅いのが気になる。柱穴址群の中央南西に焼土が、直径35cmの方形に3cmの厚さで遺存していた。なお、北側には、直径50～100cmにかけての大きさをもつ花崗閃緑岩の自然石が遺存している。周辺からは、人目、施釉陶器（瀬戸・美濃産）、繩文土器片等が出土している。

南の堀(第16・17図、写真7)

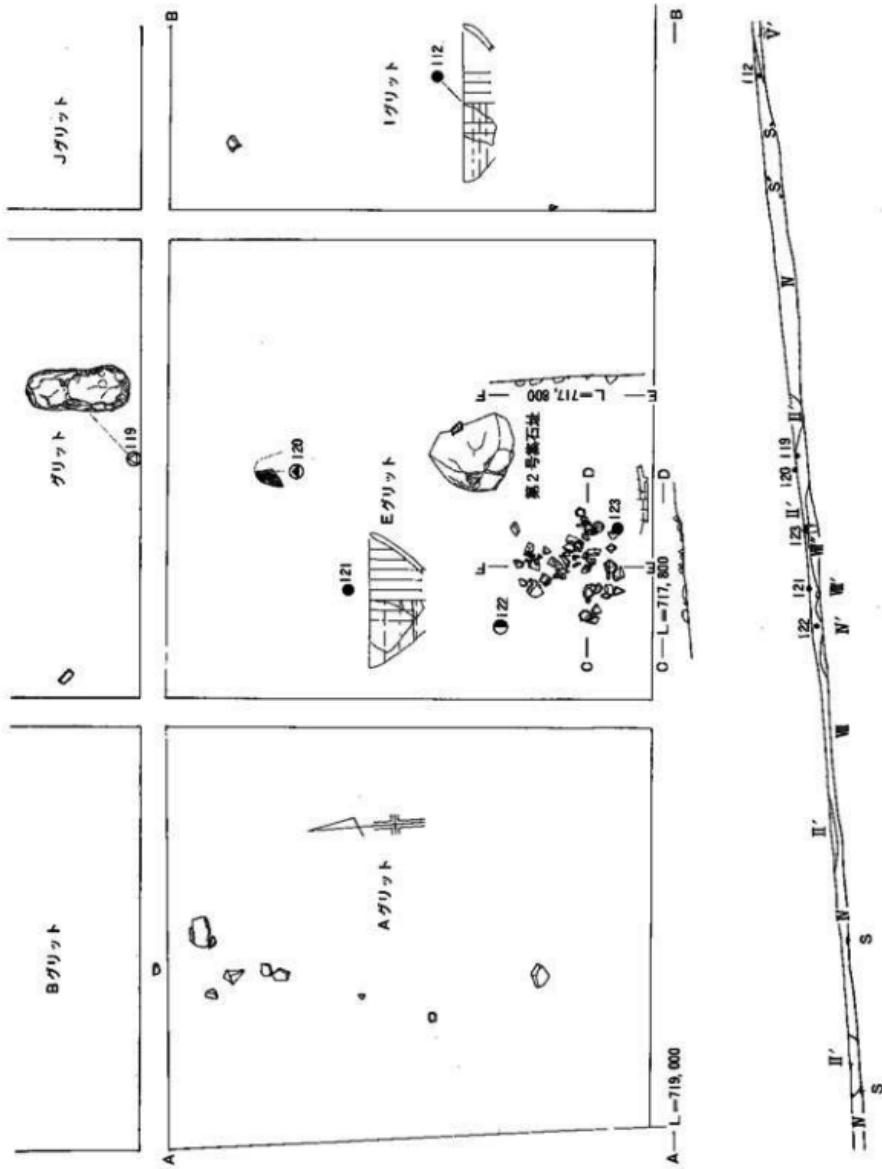
本跡は、南区の南端より検出され、6—さG・Pから1—あG・Pへと北へやや弓なりとなっている。現地では、長さ21mが検出され、東と西へ延びる様相をしている。東端では、幅2m10cm、深さ60cm、中央部で、幅2m、深さ60cm、西端で、幅3m70cm、深さ75cmと徐々に西に向って広って行く。堀堆積土層の疊の高さは、東で高く、西で低い。最下層には、褐色土+砂利の混土が堆積しており、流水の痕跡をもつ。出土遺物は、Na169の施釉陶器のみが堀内から出土し、周辺からは、施釉陶器（近世）、古銭（寛永通宝）、打製石斧等が出土している。

敷石火葬墓(第18～20図、写真8)

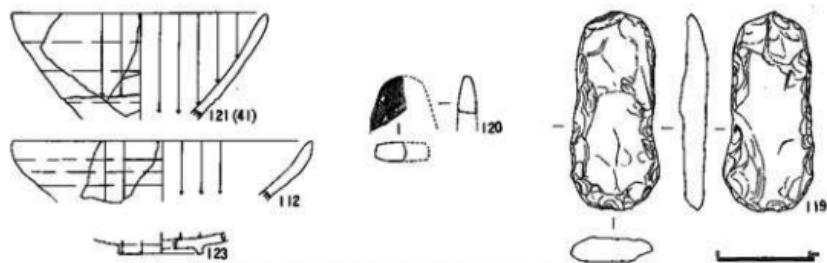
本跡は、南の堀の西端の黒褐色土層から検出され、東西3m、南北1m50cmの橢円形状に、木炭粒が分布し、IとIIベルトの間に敷石火葬墓が遺存していた。堀に直交して、長さ45～65cm、幅20～35cm、厚さ20cm前後の花崗閃緑岩が5点敷かれ、東側には短い石を補うかのように、長さ20～30cm、幅15cm、厚さ15cm前後の花崗岩2点と花崗閃緑岩2点が敷かれていた。規模は、南北1m50cm、東西1m10cm、深さ30cmを測る。敷石上には、関節部状の骨片、尺骨・上腕骨状の骨片、焼土、木炭が5～10cmの厚さで遺存していた。出土遺物は、灰釉、施釉陶器が出土している。



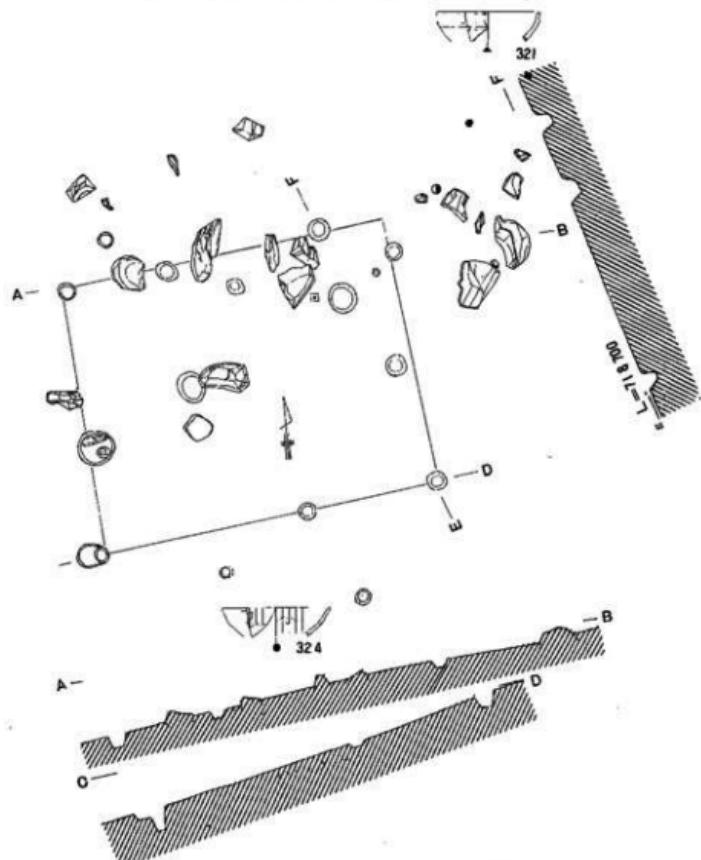
第II図 第I号集石址及び周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



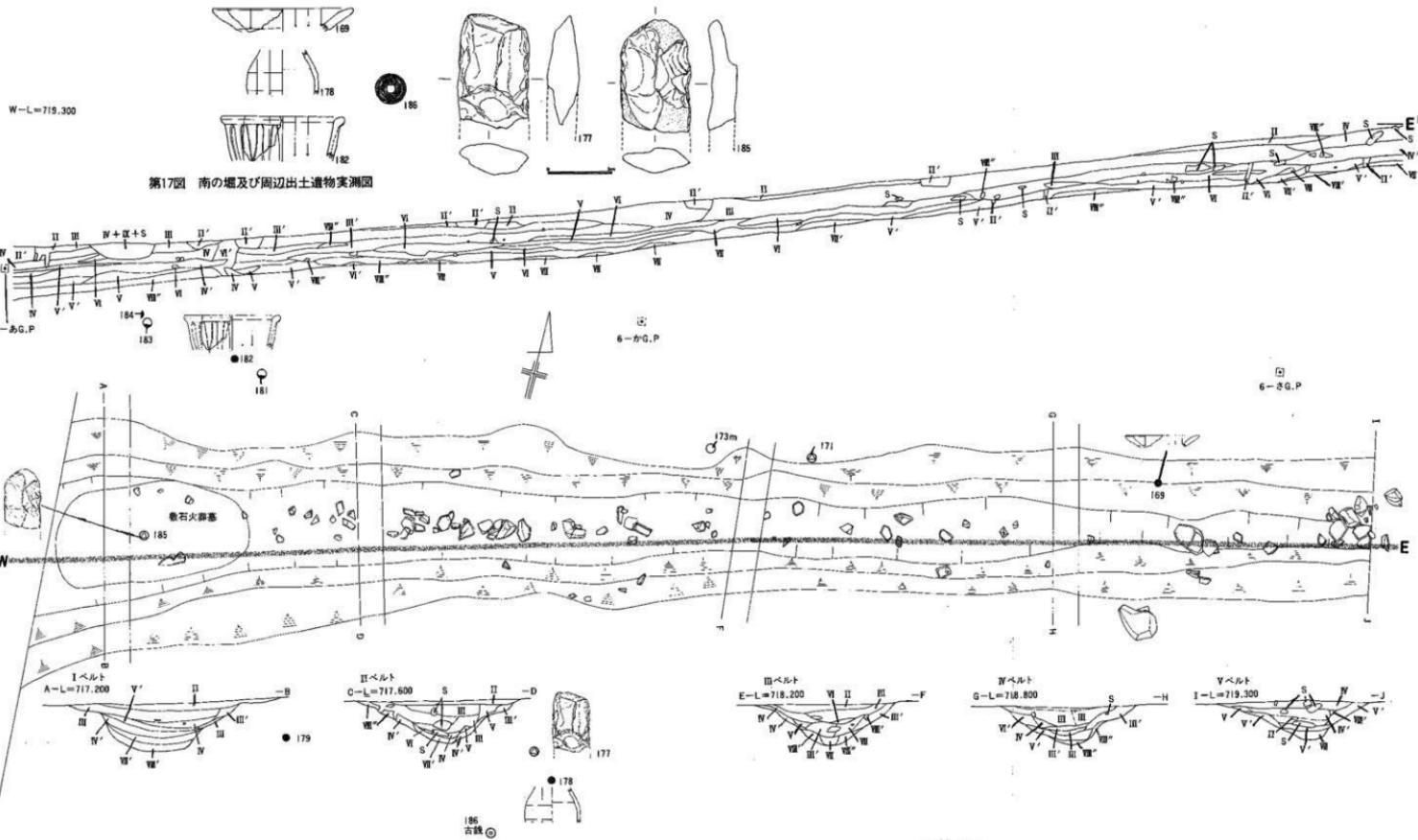
第12図 南区A・B・E・F・I・Jグリッド、第2号集石址実測図及び出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{60}$)



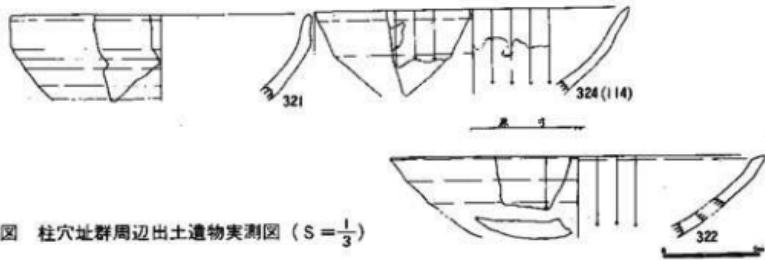
第13図 第2号集石址及び周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



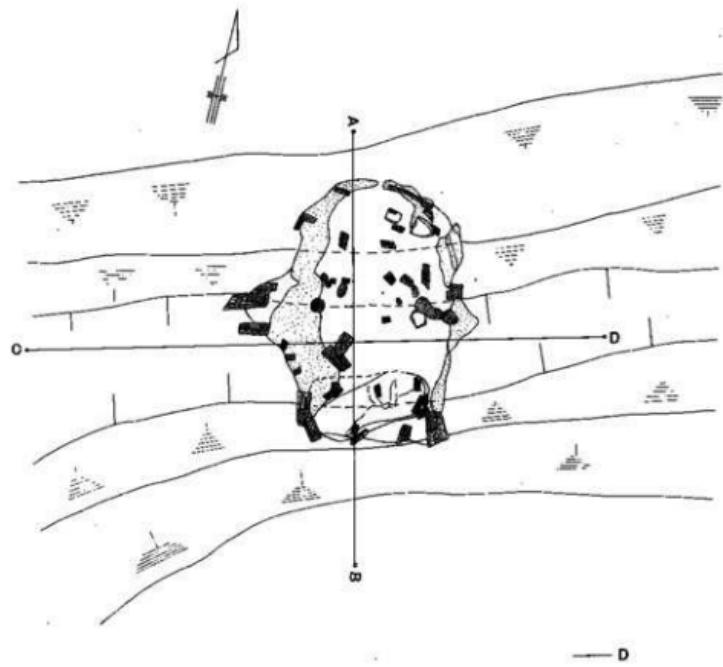
第14図 柱穴址群実測図及び遺物分布図 ($S = \frac{1}{60}$)



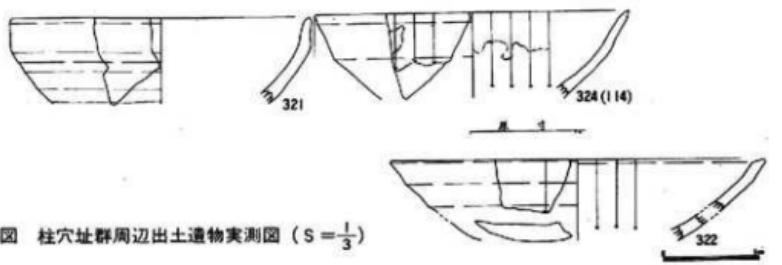
第16図 南の堀実測図及び遺物分布図 ($S = \frac{1}{60}$)



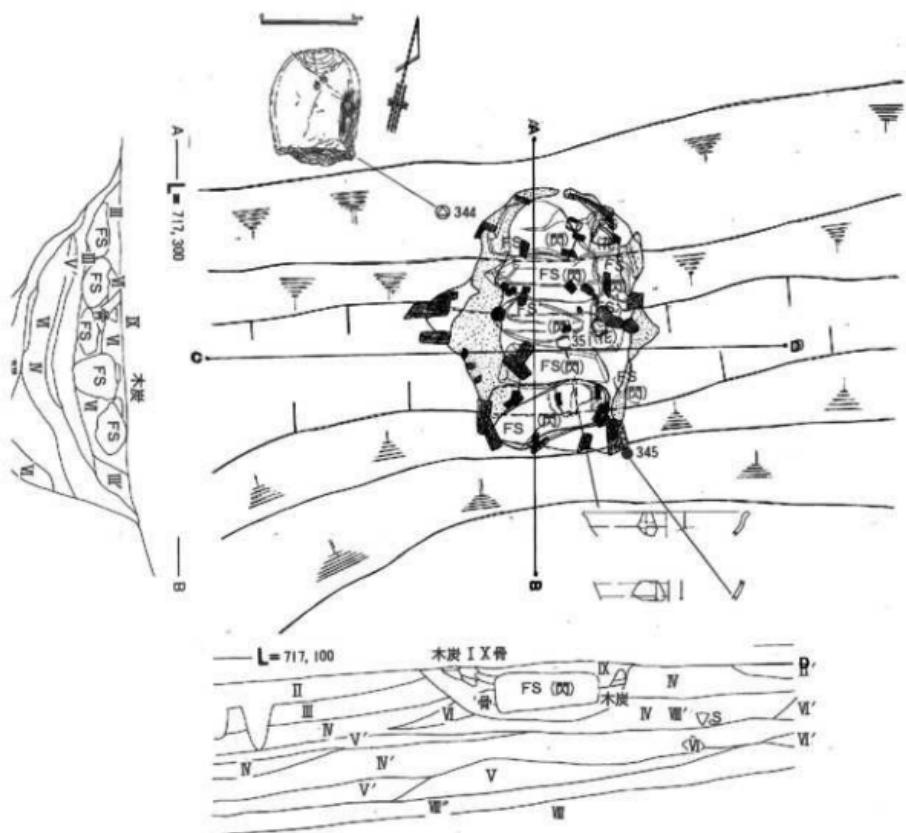
第15図 柱穴址群周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



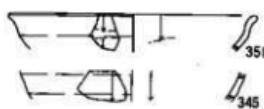
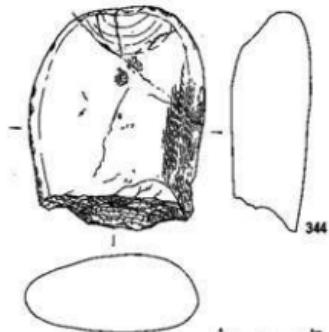
第16図 敷石火葬墓実測図 ($S = \frac{1}{30}$)



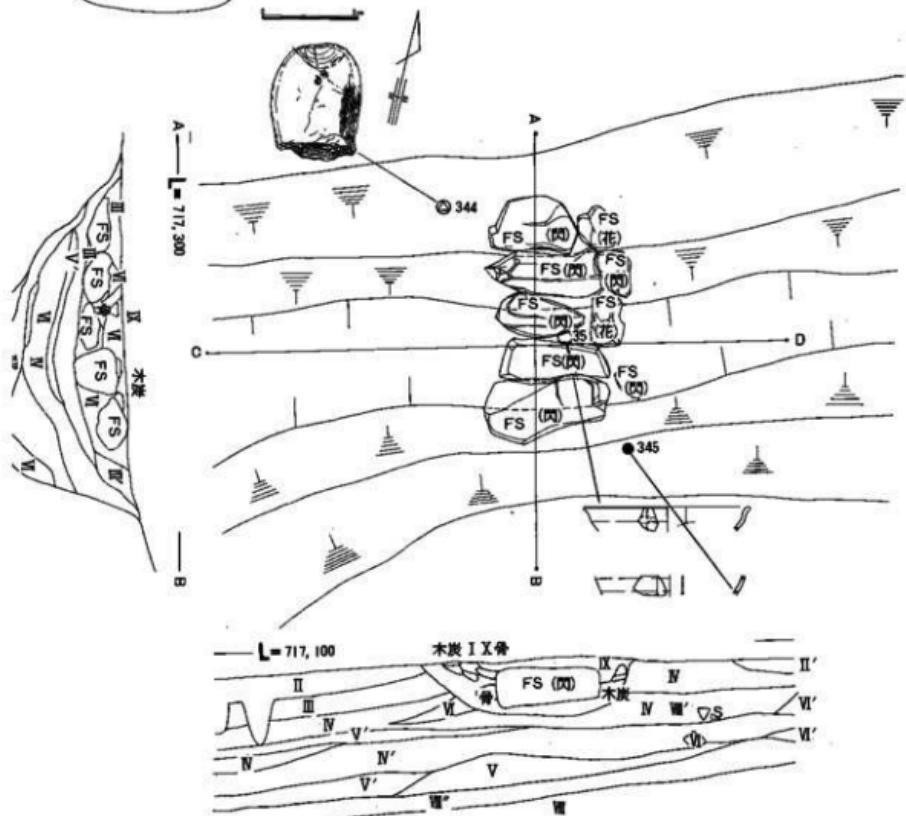
第15図 柱穴址群周辺出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



第18図 敷石火葬墓実測図 ($S = \frac{1}{30}$)



第19図 敷石火葬墓及び周辺出土遺物
実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



第20図 敷石火葬墓実測図及び遺物分布図 ($S = \frac{1}{30}$)

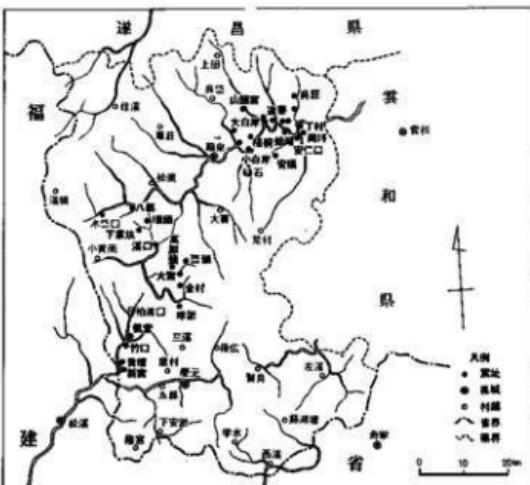
第Ⅳ章 考察

第1節 出土遺物

1. 青磁器

当遺跡からは、No.1・17・29、表採資料の4点が出土している。No.1は、碗口縁部片で、10分の1個体の大きさである。推定口径17.6cm、推定器高5.0cm、同底径4.8cmで、器壁厚は5mm前後を測る。釉調は、淡緑色で、胎土色は灰白色をしている。焼成は良好。釉の厚さは1mm前後で、蓮華文を彫り込んでいる。No.17は、碗底部上端部片で、2分の1個体の大きさである。推定底径は、6.6cmを測る。器壁厚は、1.1cmを測り、No.1より厚く、大きなものと考えられる。釉調は、No.1より明るい淡緑色で、胎土色は灰白色であり、焼成は良好。釉の厚さは1mm前後である。No.29は、三足香爐の口縁部片で、6分の1個体の大きさである。推定口径は12.6cm、推定器高は、8.2cm、同胴径は、13cm、同底径は、6cmを測る。器壁厚は、6mm前後で、釉調は明緑色で、胎土色は、暗灰色で、嫁入が内外にある。No.1・17より濃い緑色である。釉の厚さは、厚いところで2.5mm、薄いところで0.5mmである。口唇部はくぼんでいて、二重口縁化している。口縁に対して平行に凹凸文を彫り込んでいて、現況では6条見える。内面側下部の施釉していない部分は、ススけている。表採資料は、釉調は明緑色で、No.1とNo.29の中間色をしている。嫁入があり、胎土色は、灰白色で夾雜物が含まれる。器壁厚は、4~5mmで、釉の厚さは0.5mmを測る。小破片の為、器形の判断は難しいが、碗縁部片と考えられる。

以上、4点の青磁器、中国明時代の13世紀から14世紀に焼かれた龍泉窯の中国青磁と考えられる。



第21図 浙江省龍泉県の古窯址分布図（「青磁」陶磁大系36より抜粋）

出土遺物一覧表

番号	種別	種別								形態	時代及び時期	計測値	特徴						
		土器	石器	骨器	貝器	瓦器	漆器	天目	常滑	青磁	内耳	漆竹	古鏡	鉄製品					
1	第9回							○							先, L3級部	14C(中国)	7.6 17.6	4.8	縦一列縫合。胎土一灰白色。施釉一淡灰色。胎土上一灰白色。
2	+							○							武器	18C		3	縦一列縫合。胎土一灰白色。施釉一灰白色。
3	+							○							仏像, 腹部	15C前半		46	頭部等, 8~10cm, 内側成直角彎曲。胎土上一灰白色。
4								○							茶わん, 腹部	15C後半			底部に三葉からねの底脚有
5															盤, 腹部	11C			
6		(○)													硬砂岩削片	縞文			
7	第9回								○						鏡, 腹部	平安	33 47.6		頭部厚1cm内外, 胎土一赤褐色。ヒビ有。
8											○				茶わん, 口縁部	15C半ば			
9											○				茶わん, 腹部	18C			
10								○							盤, 口縁部				
11	第9回										○				蓋器	15C~16C		25	No.53と同。
12	+							○							茶わん, 腹部	15C		16.8	縦縫合等, 8mm内外。色調一淡緑色。胎土一灰白色。
13	+							○							茶わん, 口縁部	15C		12.2	縦縫合等, 8mm内外。内側等, 1cm程度, 胎土一灰白色。内側色。
14	+							○							鏡, 頭部	15C			色調一暗緑色。胎土一灰綠色。
15		○													石器, 未製作	縞文			
16	第9回							○							鏡, 頭部	15C半ば	33 47.6		頭部厚1cm内外。
17									○						鏡, 岐基	14C(中国)			胎土一灰白色。
18		○													有旋石器, 肩錐形	縞文		45g	No.48
19										○					茶わん, 腹部	18C			
20	第9回								○						鏡, 口縁部	14C~15C	33 47.6		頭部厚1cm内外。
21										○					鏡, 山腹部	15C半ば	28.8		頭部厚1cm内外, 斜縫を有する。胎土等, 異様な構造。
22										○					鏡部	15C~16C			
23		○													内黒土環底耳杯	11C			内幅5mm。
24	第9回								○						鏡, 口縁部	15C半ば	33 47.6		頭部厚1cm内外。
25	-																		母綠色。
26																			火炎, 白練部分花文。
27	(○)														石英尾, 大打石	中世			
28	第9回							○							鏡, 腹部	15C半ば	33 47.6		頭部厚1cm内外。
29	+									○					垂印, 口縁部	14C(中国)	8.2 13.6 13		胎土一灰褐色, かん入, 胎土一暗灰色。内側一スヌード。
30	+									○					鏡, 腹部	15C半ば	33 47.6		頭部厚1cm内外。
31		○													鐵錐形, 腹部	縞文			
32															木炭				
33	第9回							○							茶わん, 口縁部	15C	16.8		頭部厚6mm内外, No.32と同。
34	(○)														石高尾				
35		○													土師矢, 腹部	11C			
36								○							矢, 口縁部	11C			
37	(○)														硬砂岩削片	縞文			
38															鏡部	15C半ば			
39									○						茶わん, 腹部		5.6 18.8		頭部厚4~6mm, 斜縫有, 黄緑色。
40	○														硬砂岩削片	縞文			
41									○						茶わん, 口縁部	15C	13		頭部厚4mm, 逆側体, 色調一淡緑色。胎土一灰白色。
42															石高尾				
43															鏡部	15C~16C			丸穴付。
44		○													土師矢, 腹部	11C			
45	○														硬砂岩削片	縞文			
46	○														黒曜石削片	#			
47															鏡部	11C			平行帯き目。
48															瓦礫片	近代			

番 号	持 因	種 別										形 態	時代及 び時期	合計測定値			特 徴
		土器	石器	土器 類	灰陶	地陶	天目	青陶	黑陶	内耳	染付			高さ (mm)	口径 (mm)	周径 (mm)	底径 (mm)
49	-																
50	第9回			○								壺、口縁部	15C半ば	33	47.6		厚壁厚1cm内外
51							○					壺部	15C~16C				
52							○					壺部	#				
53	第11回						○					口縁部	#	28.4			W.L.D.=第一、色調=褐色。新 一色調付外
54	#						○					壺、壺部	15C半ば	28.8			厚壁厚1cm内外、W.L.D.と同一。 壺底=石英多し
55		○										壺体形、壺部	圓文				
56				○								壺わん、壺部	11C				
57		(O)										砂岩					
58		(O)										石头風					
59		(O)										珊瑚岩					
60		○										石英塊、大打石	中世				
61												壺部	15C~16C				
62	第11回			○								壺、口縁部	11C	15.8			厚壁厚4mm、色調=灰褐色。新 一色調付外
63												壺部	15C~16C				会面人又付外
64	第11回			○								壺、壺部	11C				平行印記有。色調=褐色。新 土=灰土。=プロセナム
65		(O)										珊瑚岩					
66		(O)										砂岩					
67		○										と石、砂状		11.1	4.0	2.5	0.2g
68		(O)										珊瑚岩					
69	第11回			○								壺部	近世	13.4			厚壁厚4mm、柱状模様か? 色調 =褐色を帯びた茶色
70				○								壺わん、口縁部	15C				
71		○										砂妙岩					
72			○									甕	11C				
73		(O)										東岩削片	圓文				
74		○										石英塊(火打石)	中世				
75		(O)										硬砂岩削片	圓文				
76		○										#					
77	第11回			○								内黒土鐘环口縁部	11C	13			色調=淡褐色。粘土=繊維很多 し、内斜面付テ
78												刀子	中世~近世	3.5	0.4		高田弓矢?
79		○										打製石垂型骨形	圓文	13.7	4.6	2.2	0.9g
80		○										と石、礫片	中世				光滑、硬砂岩
81		(O)										珊瑚岩					黄岩
82		(O)										花崗岩					
83		(O)										花崗岩					
84		○										石英塊	中世				
85												壺部	15C~16C				表面又付外
86		○										柔軟形、堅膜	圓文				
87	第11回				○							环	口縁部	11C	14		色調=淡褐色。粘土=淡白色。 口縁部外反
88	#	(O)										砂岩					
89	#				○							壺わん、口縁部	15C前半	14			厚壁厚5mm、粘土=淡褐色。新 土=灰土、少々外反
90			○									内黒土鐘环口縁部	11C				
91					○							口縁部		13.4			広口形か? 粘土=灰白色。コブ テ付テ付テ付
92	第11回			(O)								硬砂岩削片	圓文	8.0	4.8	0.7	4.6g
93												壺わん壺部	15C				
94	第11回			○								打製石垂型骨形	圓文	(5.4)	4.5	1.0	0.36g
95							○					壺わん壺部	15C前半		38		厚壁厚4~5mm、竹葉片
96												珊瑚形、壺部	圓文				
97												#	#				
98	第11回						○					打開壺	14C	9.6	4.1		壁厚3~4mm、外側灰、色調= 明灰白色。粘土=灰白色
99	#											柔軟形最薄	圓文	12.3	3.5	2.0	0.19g

番号	拂 団	拂 洞										形 態	時代及 び時期	計測値	特 徴		
		土器	石器	土制 器	漆器	灰陶	埴輪	天目	當番	青磁	内耳						
100		(○)										黑漆右脚片	绳文				
101	第11回	○										打撲右足背形	#	6.5 3.9 1.1 41g	刃部欠く。硬砂岩		
102				○									15C		13	赤褐色一暗茶褐色。胎土一灰褐色	
103	○				○							深縫形脚部	绳文中期前半			赤褐色	
104						○						すり跡	15C			竹管火	
105	○											深縫形、脚部	绳文中期前半				
106	○					○						茶わん口脚部	15C				
107	○											深縫形、頭部	绳文中期				
108			○									腹脚部	11C				
109	○											と石、脚状	中世	455g	麻灰岩		
110							○					茶わん口脚部	18C				
111	-																
112	第12回			○								茶わん口脚部	15C	15.4	器壁厚 5mm内外。色調一灰褐色 底二灰白色		
113	(○)											黄岩	绳文				
114	-													15.2	器壁厚 4~5mm		
115	(○)											長石					
116	(○)											長石					
117	(○)											長石					
118	(○)											長石					
119	第13回	○										打撲右脚短用形	绳文	10.0 4.6 1.3 93g	麻灰岩、光形		
120	#	○										磨製石斧	#	2.8 1.8 1.0 5g	石器		
121	#			○								茶わん口脚部	15C				
122	○											深縫形脚部	绳文中期前半				
123	第13回		○									底部	18C		4.2	青黄色、色調一様灰色。胎土一 灰白色。へ少ゆり	
124	-																
125	○											打撲右脚底片	绳文			刃面のみ、硬砂岩	
126	第9回			○								茶わん口脚部	15C前半	15		器壁厚 6mm。胎一灰褐色。胎 上一灰白色。やや外傾	
127	#			○								茶わん口脚部	#			器壁厚 6mm内外。胎一黑色。胎 上一灰白色	
128	#											○ 梗状	中世~近世	2.8 2.2 0.9	折り出ししみり		
129							○					茶わん口脚部	18C				
130	第9回		○									且口部	15C	7.8	器壁厚 4mm。色調一灰白色。 胎土一乳白色		
131								○				口緣部	15C~16C				
132	第5回				○							灯明臺	18C		4.8		
133	○											深縫形脚部	绳文				
134	-	○										すり石	#			砂岩	
135	○											と石	中世			粘土岩	
136								○				茶わん口脚部	18C				
137	第9回				○							變脚部	15C半ば	33	47.6	器壁厚 1cm内外	
138	(○)											變脚部	绳文				
139									○			茶わん底部	18C				
140	第7回	○										深縫形脚部	绳文中期前半			青黄色、色調一淡褐色。胎土一 灰白色。云母含む	
141	#	○										石英風火吹石	中世	4.5 4.8 3 56g	全表面打撲面あり。おむすじ形		
142	#	○										深縫形脚部	绳文中期前半			No.168 同一倒体竹宮丸	
143	#											内耳部	15C~16C			内耳部 (6x1.2) 2個の形。胎調 一灰褐色。口唇部円滑平坦	
144	#								○			變脚部	15C			器壁厚 1cm内外。こまかい斜面 凹所へラナテ原褐色	
145	#											○ 梗状	中世~近世	8 5 4			
146	#								○			変脚部	15C~16C		29	色調一暗褐色。胎土一粘土岩	
147	(○)											器口部					
148	-											器口部					
149												脚部	15C~16C				
150												口唇部	#			表面スス付痕	

番号	持 因	種別									形態	時代及 び時期	計測値	特 徴			
		土器	石器	土師 器	環状 器	灰陶	基盤	天目	青磁	内耳	染付	古器	鉄製品				
151		○												最打部、棒状	圓文		両面丸たく
152				○										すり棒彫部	18C		
153	-																
154	-																
155		(○)					○							脣部片	15C~16C		鉄筋ス付壁
156														石突片			
157							○							脣部	15C~16C	33 47.6	厚壁厚1cm内外
158								○						#	#		
159 第7回				○										茎わん底部	15C前半	4.4	所々高台、施一色黒、施木一色 白台、内面施厚い
160		(○)												黒曜石削片	圓文		
161							○							脣部	15C~16C		
162								○						#	#		火炎付窓
163								○						脣部	#	21.8	色調、暗褐色。胎上一様透明白 素面火炎付窓
164								○						脣部	#		
165 第7回								○						口唇部	#		色調、暗褐色。胎上一様透明白
166		(○)												長石塊			
167				○										茎わん底部	15C		
168		(○)												輝綠岩			
169 第17回			○											灯明皿	15C	10.8	厚壁厚6mm内外、色調一様緑色 胎土一様白色
170		(○)												輝綠岩			
171		(○)												吸砂岩削片	圓文		
172														輝綠岩			
173		○												すり石	圓文		花崗岩
174		(○)												輝綠岩			
175	-																
176		(○)												吸砂岩削片	圓文		
177 第17回		○												打製石斧頭骨形	#	(8.9) 5.5 2.4 117g	刃部少く、吸砂岩 刃幅厚3mm、色調一様灰色、胎 土一様白色
178	#			○										小型削器	18C	5.2	
179			○											直柄器	11C		
180		(○)												硬砂岩削片	圓文		
181							○							茎わん、口縁部	18C		短管体
182 第17回			○											鏡口鋸部	18C末	9.4	鏡幅厚3mm、斜面にすぐれ抜大 の折り込み、色調一様白色
183														茎わん口縁部	18C		
184		(○)												直握石削片	圓文		
185 第17回		○												打製石斧頭骨形	#	(8.8) 5.4 2.0 117g	刃部少く、吸砂岩
186	#							○						寛永通宝	17C		
191				○										茎わん側部	15C前半		
192				○										鏡口鋸部	15C		
193			○											茎わん口縁部	#	19.2	鏡幅厚6mm、色調一様灰色、胎 土一様白色
194			○											#	#	19.2	No.130と同一物体、鏡幅厚6mm 内外
195		(○)												硬砂岩削片	圓文		
196							○							茎わん	18C		
321 第15回				○										茎わん口縁部	15C	15.4	鏡幅厚6mm、色調一様灰色、胎 土一様白色、少し外側
322	#			○										#	#	19.2	鏡幅厚5mm内外
323		○												深体形削器	圓文中期		
324 第15回				○										茎わん口縁部	15C		
325				○										直柄器	#		
344 第9回		○												敲打器	圓文	11.6 9.0 3.9 540g	頭部少く、表面剥離感、頭面一様 丸い、厚さ一様
345	#				○									直柄器	15C	11.6	鏡幅厚4mm
351	#				○									外、口縁部	11C	12.0	鏡幅厚3mm

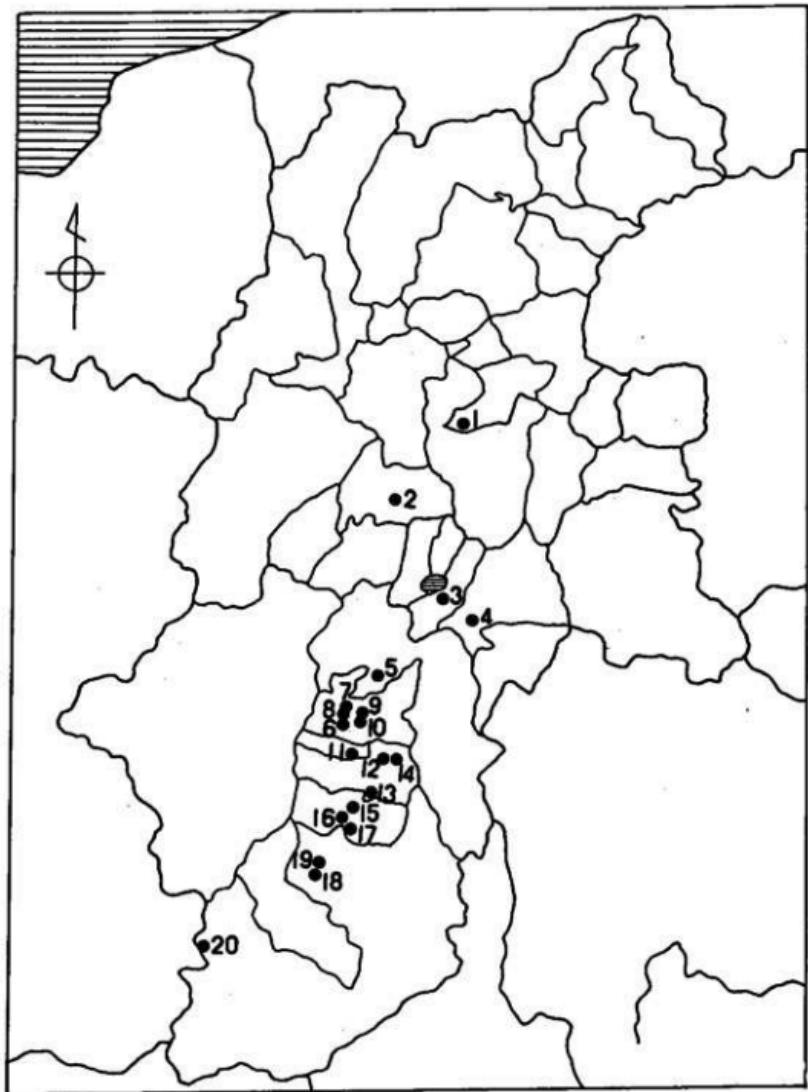
*計測値の単位は高さcm, 口径cm, 脚径cm, 底径(重さ)cm(g)で。

長野県内青磁器・白磁器等出土遺跡一覧表（概略表）

No	遺跡名	出土遺構	青磁	白磁	他	時代	備考	No	遺跡名	出土遺構	青磁	白磁	他	時代	備考
1	権田城	G-11グリッド	○			(中国)	7点(上田市)	14	青木	木炭・焼土集中	○			13-14C	1点(香炉)
			○	(#)	21点				遺構外		○			#	2点(碗)
			○	(#)	青花26点				B-グリッド		○			#	1点
2	松本工業高校	石塙河原砂利層	○			(#)	1点(松本市)		表採		○			#	1点
		トレンチ	○	(#)	1点				南の堀		○			近世	1点
			○	(#)	3点				D-グリッド		○			#	1点
3	武居城		○	中性				15	唐沢城	第1号住居土	○			宋	1点(板島町)
4	御社宮司	堅穴状追拂	○			13-14C	3点(茅野市)				○				1点
			○	#	1点				第2号住居土		○				3点
		礎群	○	#	3点				第1号柱穴社		○				1点
		E追拂	○	#	8点				第2号	#		○			山陽2点
		遺構外	○	#	3点				#	#	○				4点
5	木下城		○	江戸	1点(箕輪町)						○				2点
6	山寺垣外(遺構外)		○	(中国)	2点(伊那市)				北区その他		○				6点
7	城平	2号地下倉庫	○	(#)							○				2点
8	大境		○	(#)					南区その他		○				5点
9	東方A		○	(#)				16	本郷中原		○			中国	2点(板島町)
10	萬葉堂		○	(#)				17	西ヶ原		○			江戸	2点(有田)
11	駒ヶ原下	遺構外	○	明治~大正	4点(宮田村)						○			中国	3点
12	上塙田	I号住居土上層	○			13-14C	3点(善光寺市)				○			江戸~明治	2点(善光寺)
		トレンチ	○	#	3点			18	瑞應寺前	遺構外	○			(中国)	(高森町)青木
			○	#	2点(青白磁)				#	#	○			(#)	中島地区
		C地区1グリッド	○	#	1点				溝2		○			(#)	#
		# 2グリッド	○	#	1点				溝3		○			(#)	#
		表採	○		14C~	1点		19	大島山東部	グリッド	○			(#)	
13	八幡	遺構外	○		13-14C	2点		20	御坂峠		○			(#)	9点(阿智村)

上記の一覧表及び第22図の分布図のように、長野県内から（当報告時点の所蔵県内報告書に限る）は、20ヶ所の遺跡より青・白磁等が出土している。中国製、日本製、不明なものがあり、正確な資料把握ではない。報文によると、茅野市御社宮司遺跡及び飯島町唐沢城出土のものが、本跡出土のものと近似していると考えられるが、未だ筆者は実見していない。

陶磁器が出土する例が少ないと、報文で明らかでないこと、資料分析・判断に困難等の点から集大成は難しいが、今後の報文を待ちたい。



第22図 長野県内青・白磁器等出土遺跡分布図

2. 白磁器

当遺跡からは、2点の白磁器が出土している。No225は、碗口縁部片で、10分の1個体である。推定口径12.4cmで、器壁厚は3.5mmを測る。釉調は、淡白色で、胎土色は、白色である。釉の厚さは、0.5~1mmである。表面口唇部に一条の横走沈線が入る。もう1点は、皿(?)の破片と考えられ、器壁厚は、4mmを測る。釉調は、淡青白色で、胎土色は、白色である。釉の厚さは、0.5mmである。縫割があり、内面底部よりに、刻線がある。

以上、2点は、近世に日本で焼かれた白磁器と考えられる。

3. 天目

当遺跡からは、数多くの碗等の破片が出土している。ここでは、本文中に図化したものを、主に考察する。

No.3は、仏花器胴部片で、釉調は、くすんだ黒褐色で、胎土色は、灰白色である。内面に成形痕が顕著である。No.13は、茶碗口縁部片で、口唇部あめ色で、胴部にかけては、黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はやや外反する。No.89は、口碗口縁部片で、釉調は、口唇部茶褐色、胴部にかけては黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はやや外反する。No.126は、茶碗口部片で8分の1個体の大きさである。釉調は、口唇部茶褐色、胴部にかけては黒褐色で、胴下部は、釉だまりしている。No.89の釉調に近似する。口唇部は、やや内傾する。胎土色は、灰白色である。No.127は、茶碗胴部片で、釉調は、黒褐色であるが、焼成時の温度でただれています。胎土色は、灰黄白色である。No.159は、第1号住より出土した。茶碗底部片で、釉調は、黒褐色で、内面には、5mm前後、釉がたまっている。胎土色は、灰白色である。底部は、削り高台である。No.321は、茶碗口部片で、釉調は、あめ色がかった黒褐色で、胎土色は、灰白色である。口唇部はまま外傾している。

以上の考察からみると、器形では、仏花器、茶碗で、釉調は、黒褐色が主体で、一部にあめ色がかかる。胎土色は、灰白色か、灰黄白色である。口唇部は、全体的にやや外反及び外傾をしている。底部では、削り高台である。

これらのことから、天目の製作年代は、15世紀前半と考えられる。

4. 常滑

当遺跡からは、大きくわけて2個体の常滑大甕の破片が出土している。1個体は、No.20・16・20・24・28・30・137・144・157の同一個体のもので、推定口径は、33cm、推定胴径は37.6cmを測る。器壁厚は1cm前後である。色調は、胴上部で赤味を帯びた茶褐色、胴下部で、赤褐色をしている。胎土には、粗い長石・石英粒を含む。胴下半部にはヘラでの成形痕がみえる。二

重口縁。もう1個体は、No21・54の同一個体のもので、推定口径28.8cm、器壁厚は1cm内外。色調は、若干赤味を帯びた鉛色調茶褐色で、胎土には長石・石英を含む。

以上、2個体は、15世紀半ばの常滑で焼かれた大甕と考えられる。

5. 潤戸・美濃陶器(当陶器は、施釉陶器として、一覧表には一括した)

当遺跡からは、天目を上回る数で多くの潤戸・美濃産の陶器が出土している。天目同様、図示できたものを主に考察する。

No12・33は、同一個体で、茶碗口縁部片で、5分の1個体の大きさである。釉調は、淡緑色(黄色がかる)で、胎土色は、灰白色をしている。釉は、外面が著しく、焼成時の温度で、ただれてい。口唇部は、外傾している。No39は、茶碗明部片で、釉調は、淡黄緑色である。胎土色は、灰白色である。焼成は良好。器壁厚は、6~7mmを測る。

以上は、いわゆる黄潤戸と呼ばれる陶器で、天目と同時代で、15世紀前半に潤戸及び美濃で焼かれたもので、潤戸産に近似すると考えられる。

6. 白 瓷

当遺跡からは、数点のものが出土しているが、図化できたものを考察する。

No62は、皿口縁部片で、色調は、淡褐色で、胎土色は、灰白色である。No91は、広口盤の口縁部片と考えられ、釉は無く、色調は、灰色で、胴土色は、灰青色で、芯部は半焼らしい。

以上2点は、11世紀東濃産の白瓷と考えられる。

7. 内耳土器

当遺跡からは、20点に近い数が出土している。

No11は、底部片で、色調は明褐色で、胎土には、精選された砂粒を含む。No53は口縁部片、No146は底部片、No143・165は内耳部片(No165は、外面にオコゲ付着)、No163は底部片である。

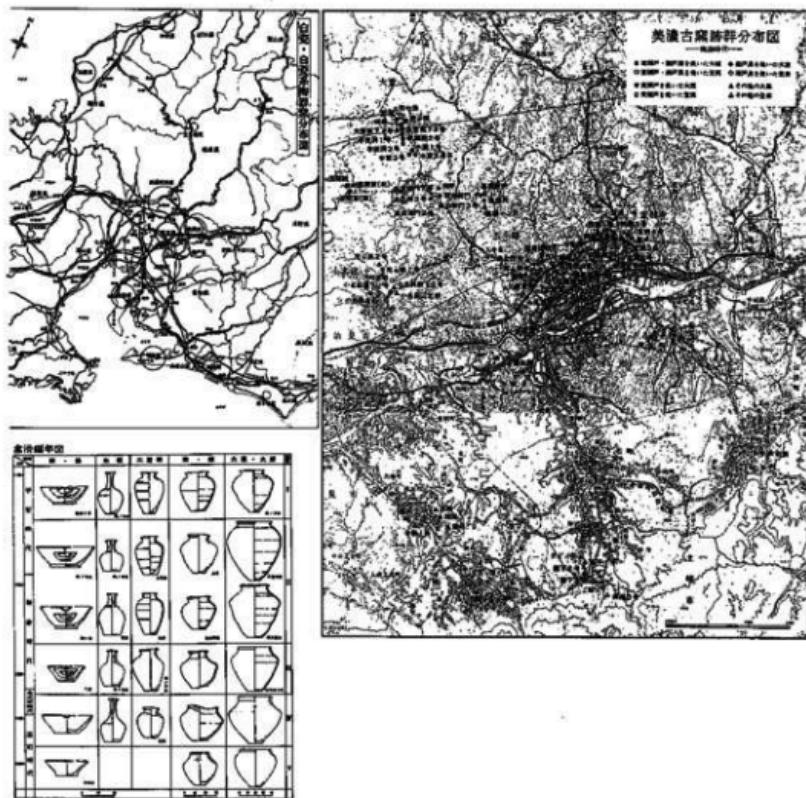
總じて、色調は、明褐色から暗褐色をしていて、胎土には、精選された砂粒を含む。いずれも内耳鍋破片である。

内耳土器についての検討は、茅野市御社宮司遺跡で詳細ではあるが、本跡出土のものは、前記報文で言う、II~III期(15世紀代)に属すが、15世紀から16世紀にかけてと考えられる。

8. 近世以降の陶器

当遺跡からは、天目、潤戸・美濃陶器(15世紀前半に属するもの)を上回る数で出土している。

No2は、茶碗底部で、釉調は、明灰白色で、胎土色は、灰白色である。底部は、付け高台で、ヘラ削りしている。No123は、皿底部片で、釉調は、淡灰色で、胎土色は、灰白色である。底部は、付け高台で、ヘラ削りしている。No132は、灯明皿胴部門で、釉調は、暗灰色で、胎土色は、



第23図 白瓷・白磁系陶器分布図・美濃古窯跡群分布図・常滑編手図
(「日本陶磁全集 6・8・14」より抜粋)

暗灰色である。No.130は、灯明皿口縁部片で、釉調は、淡黄白色で、胎七色は、乳白色である。No.182は、碗(?)の口縁部片で、釉調は、灰白色で、胎土色は、同じく灰白色である。すだれ状の影り込みが縱位になされている。

以上は、釉調、胎土色、製法からみて、18世紀の瀬戸・美濃産の陶器と考えられる。

No.8・129・136・181は、染付茶碗口縁部片で、釉調は、明白白色で、胎土色は、白色及び灰白色(No.181)である。酸化コバルトで、すだれ状文やさざ状の絵が付けられている。

No.8・129・136は、有田産、181は瀬戸産と考えられ、18世紀～19世紀製作のものと考えられる。

9. 石 器

本跡では、打製石斧、敲打器、磨製石器、火打石、黒耀石剝片が出土している。總体的な考察は略すが、No.141の火打石は、中世に属し、No.344は縄文早期末頃に属すと思う。

第2節 遺 構

遺構の時代考察を簡単に記したい。出土遺物及び遺跡の性格から判断する。

第1号住居跡は、天目・内耳等から、15世紀前半から16世紀初頭として位置けたい。焼土集中箇所、焼土・木炭集中箇所、配石遺構1・2、礎石も、同様に位置付ける。

第1号・2号集石址、柱穴址群は、直接判断する資料は不足しているが、15世紀から16世紀と位置付け、南の壠も同様である。

敷石火葬墓は、明らかに、南の堀覆土を掘り込んで構築されているので、16世紀末以降と位置付けたい。

第V章 ま と め

6週間余にわたって、第1次調査を実施し、駒ヶ根市及び長野県内で、出土の少ない中国青磁器の検出ができ、また、昭和59年度に予定される青木城遺跡の前段階的発掘調査ができた。

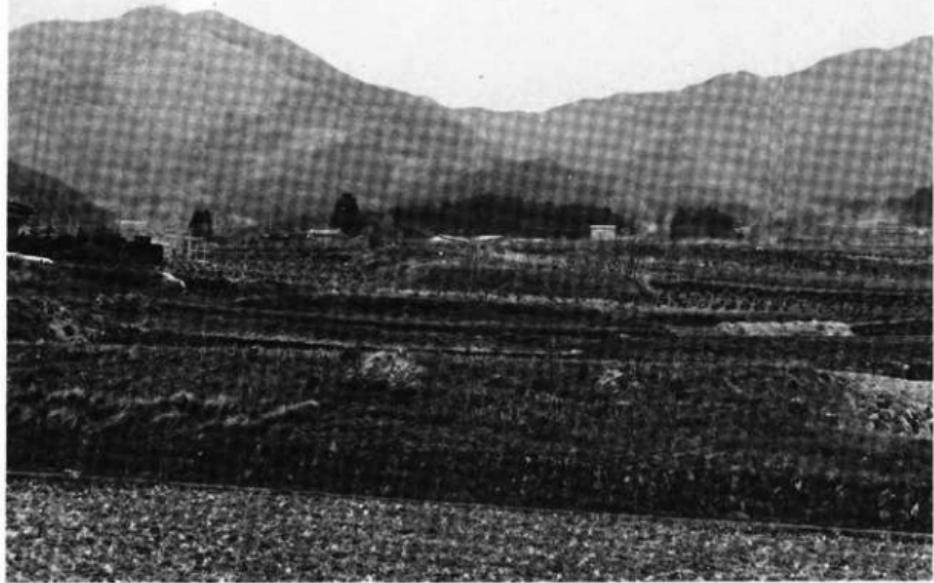
中世の遺跡を発掘調査することは、他の時代の遺跡の調査と若干異なり、出土遺物も又、遺構も少ないので現況にある。また、出土遺物の時代・年代判定が難しい面、歴史的文献との係わりが希薄である面、中世の遺跡の体系的集大成がなされていない面等が、桎梏として現実的にある。

今回の調査で、充分に遺構・遺物の検証・分析ができるとは言い難いが、一資料として、研究される方々や近似の遺跡の調査をされる方々に一助となれば幸いと考えている。

最近、国県補助事業対象として、各地区で埋蔵文化財の発掘調査が実施され、「その成果」としての報告書の刊行が遅れ、全県・全国的な問題として表出してきた。報告書の刊行が遅れるという理由は、単に、発掘担当者の怠慢では決してないと筆者は考えている。発掘調査に至る経緯、発掘調査体制、開発事業の規模、同進捗情況、文化庁・県教委・各市町村の「文化財」保護体制等の複雑化した矛盾を要因として生まれてきたものである。又、発掘担当者自身の「歴史的文化の遺産」を護り、子々孫々にまで継承発展させるべき「歴史観」の不明瞭さにあると考えられる。筆者自身も、決して例外ではない。今こそ、様々な体系、「歴史観」等が、「歴史的文化遺産の保護・保存・継承発展」の命題のもとに、検証される状況であると痛感している。

本文で大変失礼と存じますが、発掘調査に御理解と御協力をいただいた作業員の皆様、地元の方々、陶磁器鑑定をして下さった瀬戸市歴史民俗資料館長、宮石宗弘氏、同学芸員、藤澤良祐氏に対して、心から感謝の意を申し上げます。誠にありがとうございました。 (小原晃一)

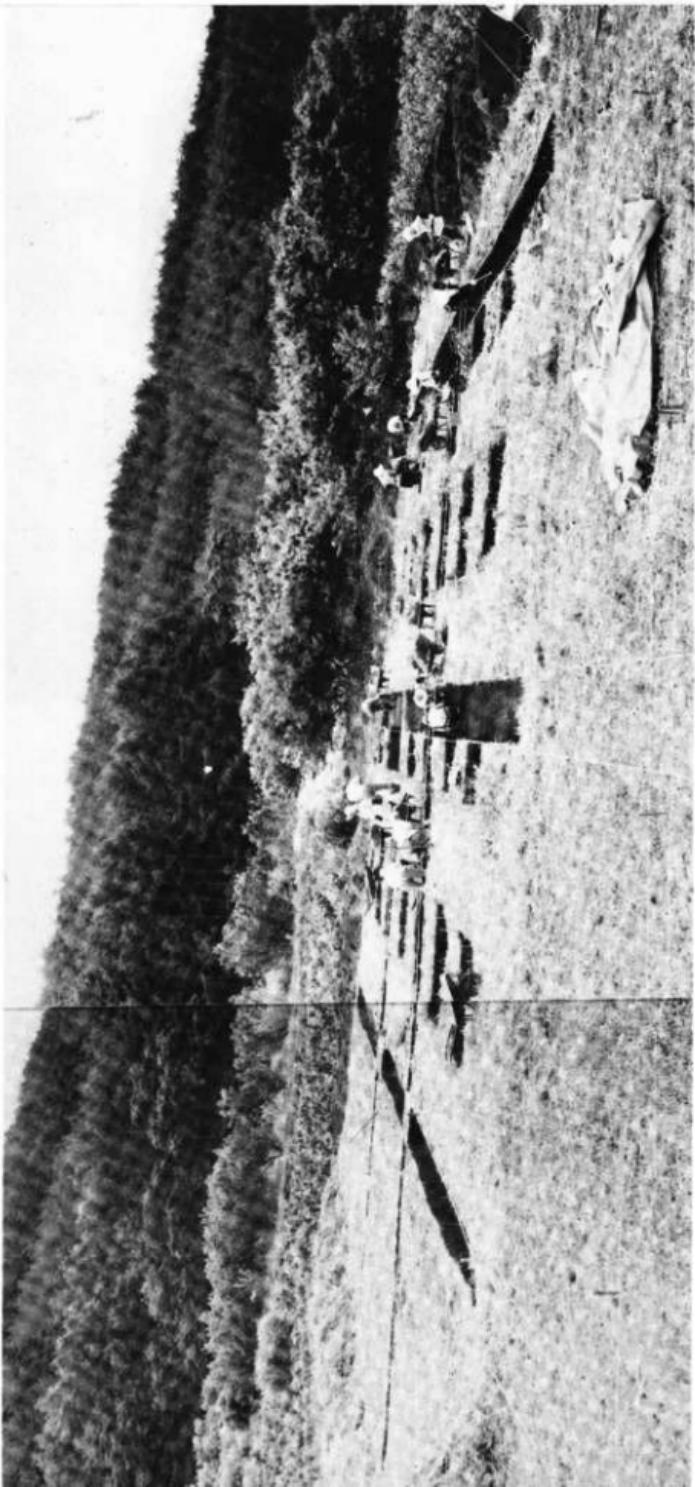
図 版



1. 青木遺跡全景（南西より）

2. 第1次調査区全景





第一次調査区南区グリット・トレンチ設定期



3. 第1次調査区近景（東より）

4. 第1次調査区南区調査風景

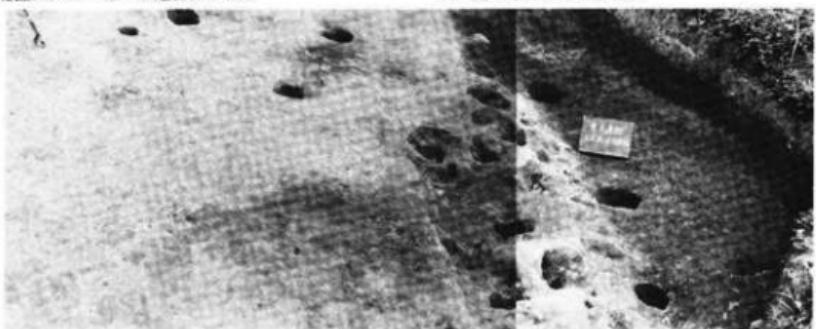




5. 北区28~30-あ~う遺物出土状態



6. 第1号住居跡検出状態



7. 第1号住居跡

8. 内耳 (No143)

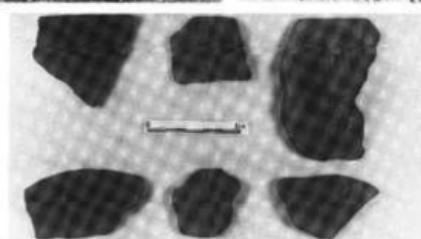
9. 鉄製品 (No143)



10. 内耳 (左: No165、右: No164)



11. 火打石 (No141)



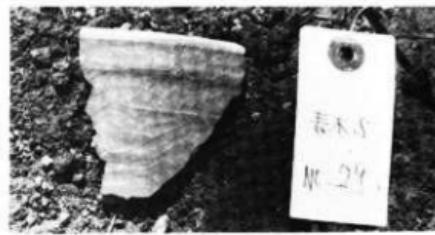
12. 第1号住居跡出土内耳土器



14. 磁石



15. 青磁 (No. 1)



16. 青磁 (No. 29)



17. 天目 (No. 126)



18. 常滑 (No. 50)

